

平成29年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

—平成29年度国庫補助事業—

平成30年（2018年）3月



茨木市教育委員会

序 文

私たちの住む茨木では、北半部は老ノ坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれたベッドタウンとして過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発に伴う埋蔵文化財の調査は全国的に減少傾向にあるのに対し、本市では緩やかながら増加しています。

本書は、平成 29 年度に実施した個人住宅建設工事に伴う発掘調査と、千提寺菱ヶ谷遺跡の範囲確認調査の概要報告書です。これら一つ一つを積み重ねた調査成果が、郷土茨木の歴史遺産として広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月 31 日

茨木市教育委員会

教育長 岡田祐一

例 言

1. 本書は、平成29年度国宝重要文化財等保存整備費市内遺跡発掘調査等事業（総額8,660,000円の内、国庫4,330,000円、市費4,330,000円）として実施した個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査及び千提寺菱ヶ谷遺跡の範囲確認調査の概要報告書である。平成29年度として、平成29年4月1日から平成30年3月31日までの期間で発掘調査及び整理作業を実施した。ただし本書では、整理作業の都合から平成29年1月から同年12月末までに調査を終了したものを対象に報告する。
2. 調査の実施は、本市教育委員会社会教育振興課歴史文化財係職員川村和子、木村健明、黒田昂嗣、坂田典彦、高村勇士、竹原千佳誉、富田卓兒、藤田徹也、正岡大実、水久保祥子、宮西貴史があたり、阿部ともよ、岡篤史、小野潤子、川西宏実、川畑康雄、吉田和弘がこれを補助した。
3. 本書の執筆は各調査担当がおこない、木村、正岡が編集にあたった。また、上記職員に加えて茨木市立文化財資料館学芸員黒須靖之、清水邦彦がこれを補助した。

凡 例

1. 本書で使用する標高はT.P.（東京湾標準海面）で表記する。各挿図に掲載する表記の内、M.N.は磁北を示し、表記のないものは国土座標系〔第VI系〕に基づく座標北を示す。
2. 挿図及び本文中の土色表記は、小山正忠、竹原秀雄 編著『新版標準土色帖』（2014年版）に基づく。また、地層の粒度の記載に関しては、基本的にWentworth（1922）の区分を使用した。
3. 遺物、図面・写真等の記録は茨木市立文化財資料館〔〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号 TEL072-634-3433〕にて保管している。広く活用されることを希望する。
4. 本書における遺構、遺物の時期決定には主に以下の文献を参考とした。
森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
古代の土器研究会編 1996『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』真陽社
九州近世陶磁学会事務局編 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
栗岡 実 2002「第3節 近世備前焼摺鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会

本文目次

序文	第1節 茨木遺跡・上中条遺跡…………… 5
例言	第2節 郡道跡・信賀遺跡・春日遺跡…………… 13
凡例	第3節 東奈良遺跡・沢良宜城跡…………… 22
第1章 地理・歴史的環境…………… 1	第4節 牟礼遺跡…………… 25
第1節 地理的環境…………… 1	第5節 耳原遺跡ほか…………… 27
第2節 歴史的環境…………… 1	第6節 千提寺菱ヶ谷遺跡…………… 33
第2章 平成29年度調査地一覧…………… 3	写真図版
第3章 調査の成果…………… 5	抄録・奥付

挿図・表目次

図1 茨木市周辺地形図…………… 1	図26 平・断面図(信賀遺跡2017-5)…………… 19
図2 平成29年度発掘調査地位置図…………… 4	図27 遺物実測図(信賀遺跡2017-5)…………… 19
図3 茨木遺跡・上中条遺跡調査地位置図…………… 5	図28 調査区配置図(春日遺跡2016-6)…………… 20
図4 断面柱状図(茨木遺跡2016-15)…………… 6	図29 平・断面図(春日遺跡2016-6)…………… 21
図5 断面柱状図(茨木遺跡2017-1)…………… 6	図30 東奈良遺跡・沢良宜城跡調査地位置図…………… 22
図6 調査区配置図(茨木遺跡2017-2)…………… 7	図31 東奈良遺跡調査地位置図…………… 22
図7 1・2面平・断面図(茨木遺跡2017-2)…………… 7	図32 断面柱状図(東奈良遺跡2017-3)…………… 23
図8 道横断面図(茨木遺跡2017-2)…………… 8	図33 断面柱状図(東奈良遺跡2017-6)…………… 23
図9 出土遺物実測図(茨木遺跡2017-2)…………… 9	図34 断面柱状図(東奈良遺跡2017-7)…………… 24
図10 断面柱状図(茨木遺跡2017-3)…………… 10	図35 断面柱状図(沢良宜城跡2017-1)…………… 24
図11 断面柱状図(茨木遺跡2017-5)…………… 11	図36 牟礼遺跡調査地位置図…………… 25
図12 断面柱状図(茨木遺跡2017-6)…………… 12	図37 断面柱状図(牟礼遺跡2016-7)…………… 26
図13 断面柱状図(上中条遺跡2017-1)…………… 12	図38 断面柱状図(牟礼遺跡2017-4)…………… 26
図14 郡道跡調査地位置図…………… 13	図39 耳原遺跡・五日市遺跡調査地位置図…………… 27
図15 郡道跡・信賀遺跡・春日遺跡調査地位置図…………… 13	図40 断面柱状図(耳原遺跡2017-2)…………… 27
図16 調査区配置図(郡道跡2016-5)…………… 14	図41 断面柱状図(五日市遺跡2017-1)…………… 28
図17 1面平・断面図(郡道跡2016-5)…………… 14	図42 船川遺跡調査地位置図…………… 29
図18 道横断面図(郡道跡2016-5)…………… 15	図43 調査区配置図(船川遺跡2017-2)…………… 29
図19 遺物実測図(郡道跡2016-5)…………… 15	図44 平・断面図(船川遺跡2017-2)…………… 30
図20 調査区配置図(郡道跡2017-2)…………… 16	図45 遺物実測図(船川遺跡2017-2)…………… 30
図21 平・断面図(郡道跡2017-2)…………… 16	図46 太田遺跡調査地位置図…………… 31
図22 調査区配置図(郡道跡2016-7)…………… 17	図47 断面柱状図(太田遺跡2017-1)…………… 31
図23 平・断面図(郡道跡2016-7)…………… 17	図48 西国街道調査地位置図…………… 32
図24 断面柱状図(郡道跡2017-1)…………… 18	図49 断面柱状図(西国街道2017-2)…………… 32
図25 調査区配置図(信賀遺跡2017-5)…………… 18	図50 トレンチ配置図・道横配置図(千提寺菱ヶ谷遺跡)…………… 33

写真図版目次

図版1 茨木遺跡	図版5 郡道跡	図版9 春日遺跡
図版2 茨木遺跡	図版6 郡道跡	図版10 船川遺跡
図版3 茨木遺跡	図版7 信賀遺跡	図版11 船川遺跡
図版4 郡道跡	図版8 信賀遺跡	図版12 千提寺菱ヶ谷遺跡

第1章 地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、東は高槻市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町、南は摂津市、北は京都府亀岡市に接しており、南北17.05km、東西10.07kmと、南北にやや長い市域を有している。

茨木市域の地理的特徴は、北半部と南半西部、南半東部の三地域に大きく分けられる。北半部は、標高300m前後の北摂山地及び、それから派生する丘陵が占める。南半西部は、標高50～100m前後で洪積層からなる千里丘陵の裾が広がり、南半東部は、市域東部を南北に縦断する安威川、北摂山地より市域中心部に流れる茨木川などの河川によって形成された沖積層からなる平野が広がり、大阪平野の一部を構成する(図1)。

第2節 歴史的環境

茨木市内で最も古い人類の痕跡は、山麓部の初田遺跡や丘陵部裾の太田遺跡、安威遺跡など、平野部に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡などで表面採集や後世の包含層内で検出された、旧石器時代後期のナイフ形石器や有舌尖頭器に認められる。

縄文時代後期から晩期になると、耳原遺跡において晩期の深鉢棺葬群が検出され、総持寺遺跡においても甕棺墓と考えられる土器が出土している。牟礼遺跡では、縄文晩期から弥生前期の土器や水田跡、井堰等が検出されるなど、茨木市域に人々が根付いている様子が窺われる。

弥生時代前期には、東奈良遺跡、目垣遺跡、総持寺遺跡、溝咋遺跡、新庄遺跡に集落跡が見られる。前期末には、耳原遺跡や郡遺跡にも集落が形成され、中期から後期にかけては遺跡数がさらに増加し、倍賀遺跡、中条小学校遺跡など、河川の兩岸や北部の丘陵、山地まで分布的広がりをみせる。特に前期から継続する東奈良遺跡は、幾重もの環濠をめぐらせており、国の重要文化財に指定されている石製銅鐻鋳型などが出土していることから、青銅器などの鍛造工房を持つ拠点集落であると考えられている。

古墳時代になると、前期に北部の丘陵に佐保川を挟んで紫金山古墳、將軍山古墳などの全長100m前後の前方後円墳が相次いで築造され、中期には、「継体天皇三嶋藍野陵」に治定されている前方後円墳、太田茶臼山古墳が全長226mの規模で築造される。さらに、低位段丘から平野部にかけては、太田古墳群、総持寺古墳群、中条小学校遺跡、郡古墳群(丘陵上の単独墳を除く)などのような、直轄の古墳

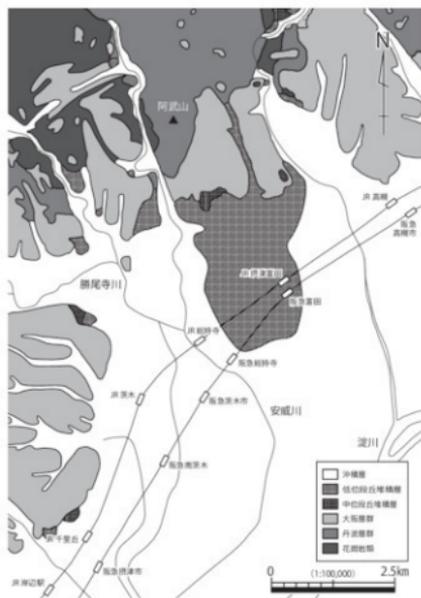


図1 茨木市周辺地形図(市原実編1993「大阪編」より作成)

群が見られる。

古墳時代後期には、南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳などが築造される。耳原古墳は大型の横穴式石室を持ち、玄室奥には蓋に計6個の縄掛突起を持つ組合式家形石棺、羨道近くには蓋に計2個の円形突起を作り出す列貫式家形石棺といった型式の異なる2基が安置されている。また、新屋古墳群、安威古墳群、將軍山古墳群、長ヶ淵古墳群、桑原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が山裾部を中心に築造される。

古墳時代の集落遺跡としては、東奈良遺跡、中条小学校遺跡、上中条遺跡、茨木遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡、郡遺跡、安威遺跡など、数多く挙げられる。近年、安威遺跡で確認された古墳時代中期から後期の集落からは、朝鮮半島南部からもたらされた特徴を持つ遺構・遺物が確認され、朝鮮半島南部から渡来した人々と密接な関係があったことが指摘されている。

奈良時代になると、茨木市域は摂津国鳥下郡に編成される。平城遷都にともない、鳥下郡には「殖村駅」が置かれ、茨木市域は宮部から難波や山陽・西海道諸国への公的な通路となる。この通路は、近世の西国街道や現代の高速道路などにもつながり、茨木市の交通の要衝たる特徴は、古代以来脈々と受け継がれている。

また、舍利容器が遺存する太田廃寺や、藤原山陰創建の総持寺、山林寺院である忍頂寺など多くの寺院が存在したことが知られる。さらに、『延喜式』には、鳥下郡に13社の神社が見られ、これは『弘仁式』にまでさかのぼると考えられている。このように、多くの寺社が市内全域にわたって見られ、古代以来、信仰という側面も茨木市の歴史を考える上で非常に重要な視点である。

中世の遺跡としては、東奈良遺跡、新庄遺跡、玉櫛遺跡、葦分神社東方遺跡などの集落遺跡が挙げられる。さらに、中世から近世初頭の遺跡には、茨木城、三宅城、福井城、泉原城、佐保砦などの城郭がある。現在の茨木市中心部には茨木城が築かれた。その城主は、茨木氏、中川氏、片桐氏と変遷し、その内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城や廃城後の近世在郷町の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも発掘調査によって得られる知見は、その解明に向けてとりわけ重要である。

また、市域北部の千提寺や下音羽には、東家の「あけずの櫃」より発見された「聖フランシスコ・ザビエル像」（神戸市立博物館蔵）をはじめ、キリシタン墓碑やメダイなど多くのキリシタン遺物が伝世している。これらの遺物は、キリシタンの文化が16世紀後半から17世紀前半にかけて禁教令下の江戸時代を通じて秘かに受け継がれてきたことを示し、多くの注目を浴びている。本書所収の千提寺菱ヶ谷遺跡をはじめ、今後発掘調査によって得られる資料は、伝世資料を補完するだけでなく、その土地に根付いた文化や歴史の細部にまで光を照らす重要な鍵となるであろう。

参考文献

- 市原実編 1993『大阪層群』
- 茨木市教育委員会 1998『茨木の史跡』
- 大阪府教育委員会 2000『安威遺跡』
- 茨木市教育委員会 2000『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』
- 中村博司編 2007『よみがえる茨木城』
- 茨木市 2012『新修 茨木市史 第一巻 通史Ⅰ』

第2章 平成29年度調査地一覧

※a～eは、平成29年1月～3月期（平成28年度）に実施したものである。

No	遺跡名〔略号〕	調査地	調査期間	面積	担当者	内容
a	郡遺跡2016-5 [KOR16-5]	郡三丁目	2017/1/10	7.5㎡	木村	ビット5基、溝3条を検出。土師器が出土。
b	牟礼遺跡2016-7 [MUR16-7]	園田町	2017/1/26	6.25㎡	黒田	遺構・遺物なし。
c	郡遺跡2016-7 [KOR16-7]	上穂積二丁目	2017/2/10	5㎡	藤田・黒田	土坑2基、ビット1基を検出。
d	春日遺跡2016-6 [KSG16-6]	春日二丁目	2017/2/27	7.5㎡	木村	ビット4基、落ち込みを検出。
e	茨木遺跡2016-15 [IBK16-15]	片桐町	2017/3/7	4㎡	高村・黒田	遺構・遺物なし。
1	茨木遺跡2017-1	上泉町	2017/4/5	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
2	郡遺跡2017-1	五日市緑町	2017/4/19	9㎡	坂田・富田	須恵器・土師器細片が出土。
3	茨木遺跡2017-2	元町	2017/4/27	4㎡	竹原・正岡	土坑2基、溝1条を検出。陶磁器、弥生土器が出土。
4	東奈良遺跡2017-3	沢良宜西二丁目	2017/5/11	4㎡	正岡	遺構・遺物なし。
5	茨木遺跡2017-3	大手町	2017/5/16	4㎡	正岡	遺構・遺物なし。
6	郡遺跡2017-2	郡三丁目	2017/5/25	4㎡	正岡	遺構・遺物なし。
7	茨木遺跡2017-5	宮元町	2017/6/13	4㎡	正岡	遺構・遺物なし。
8	上中条遺跡2017-1	上中条二丁目	2017/6/20	6㎡	木村	弥生土器、土師器細片が出土。
9	耳原遺跡2017-2	耳原二丁目	2017/6/23	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
10	鮎川遺跡2017-2	鮎川二丁目	2017/7/10	4.6㎡	坂田・富田	土師器、黒色土器等が出土。
11	茨木遺跡2017-6	片桐町	2017/7/11	6㎡	坂田	遺構・遺物なし。
12	太田遺跡2017-1	太田二丁目	2017/7/12	6㎡	高村	遺構・遺物なし。
13	沢良宜城跡2017-1	美沢町	2017/8/17	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
14	牟礼遺跡2017-4	園田町	2017/8/18	6㎡	木村	須恵器、土師器細片が出土。
15	五日市遺跡2017-1	上野町	2017/8/28	6㎡	正岡	遺構・遺物なし。
16	東奈良遺跡2017-6	東奈良一丁目	2017/9/19	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
17	東奈良遺跡2017-7	沢良宜西二丁目	2017/9/22	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
18	西国街道2017-2	豊川四丁目	2017/11/9	6㎡	木村	遺構・遺物なし。
19	倍賀遺跡2017-5	春日五丁目	2017/11/15	6㎡	富田	ビット8基、溝1条、落ち込みを検出。須恵器、土師器が出土。
20	千提寺菱ヶ谷遺跡 2016-2	大字千提寺	2017/1/23～ 3/31	236㎡	坂田	土坑を検出。
21	千提寺菱ヶ谷遺跡 2017-1	大字千提寺	2017/11/21～ 2018/3/31	53㎡	坂田	土坑を検出。人骨が出土。

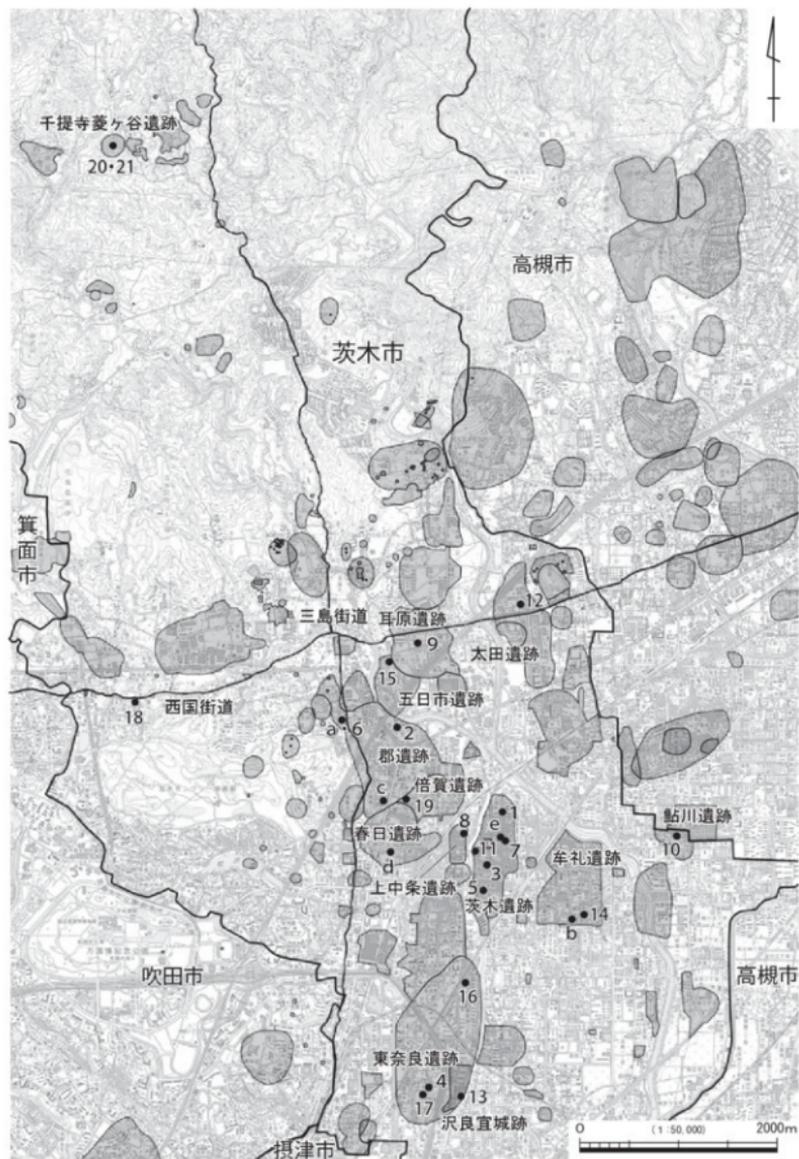


図2 平成29年度発掘調査地位置図 (アルファベット・アラビア数字は館員 No. と対応する)

第3章 調査の成果

第1節 茨木遺跡・上中条遺跡

1. 茨木遺跡 2016-15 (IBK16-15) (図3・4)

調査地 片桐町1244番7

調査面積 4㎡

調査期間 平成29年3月7日

調査担当 高村勇士・黒田昂嗣



図3 茨木遺跡・上中条遺跡調査地位位置図

はじめに 片桐町において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×2mの調査区を設定し、確認調査を行った。

基本層序 層序は上から、0-1a層（盛土）、1-1a層（暗灰黄色砂質シルト混じり細砂）、1-2a層（灰色粗砂混じり中砂）、2-1a層（灰オリーブ色細砂混じり極細砂・旧耕土）、3-1a層（灰オリーブ色細砂～極細砂）、4-1a層（にぶい黄色砂質～粘質シルト）、5-1a層（灰色粗砂混じり細砂～極細砂）である。

遺構・遺物 遺構検出は、1-1a層および、3-1a層・4-1a層・5-1a層の各層上面において行った。その結果、3-1a層上面において2-1a層を埋土とする鋤溝1条を検出した。4-1a層は締まりが強く、上面に遺構が遺存している可能性があったが、遺構を検出することはできなかった。なお、5-1a層以下は、湧水で壁面が崩壊したため、調査を終了した。

今回の調査では、遺物は出土していない。

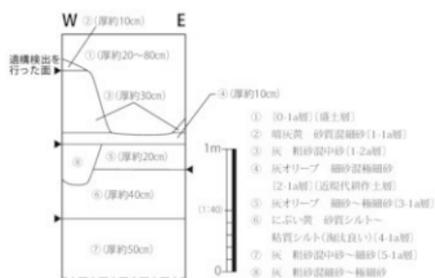


図4 断面柱状図（茨木遺跡 2016-15）

2. 茨木遺跡 2017-1（図3・5）

調査地 上泉町23番16

調査期間 平成29年4月5日

調査面積 6㎡

調査担当 木村健明

はじめに 上泉町において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×3mの調査区を設定し、確認調査を行った。調査地の現況地盤は東面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 層序は上層から、0-1a層（盛土）、1-1a層（黒褐色粘質シルト）、2-1b層（灰白色粗砂）、2-2b層（灰白色粗砂～礫（直径10cm程度）、（一部に鉄分が沈着する））、3-1b層（青灰色粘質シルトと灰黄色粗砂の互層）である。

遺構・遺物 今回の調査では、遺構・遺物ともに検出することはできなかった。

まとめ 確認した堆積層が粗砂層主体であったことから、安定した遺構面が形成されにくい状態であったと思われる。

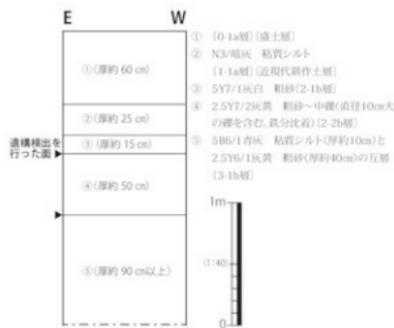


図5 断面柱状図（茨木遺跡 2017-1）

3. 茨木遺跡 2017-2（図3・6～9 図版1～3）

調査地 元町1501番4

調査期間 平成29年4月27日

調査面積 4㎡

調査担当 竹原千佳誉・正岡大実

はじめに 元町において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地南端付近に2×2mのトレンチを1箇所設定して確認調査を行った。調査地の現況地盤は、北面する道路面とほぼ同一である。調査

の結果、耕作土層・土壌層・水成層などの各地層が良好に遺存しており、複数遺構面において遺構・遺物を確認するに至ったため、本発掘調査を実施した。

基本層序 今次調査の基本層序は、図7のとおり大別6層、細別11層に区分できる。以下に大別層の概要を記す。

0層：盛土・現代耕作土層等(0-1a～0-3a層)

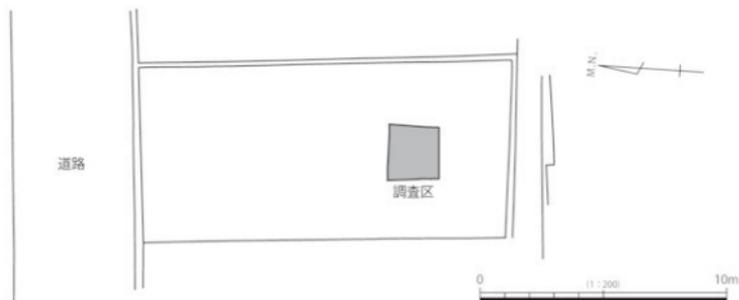


図6 調査区配置図(茨木遺跡 2017-2)

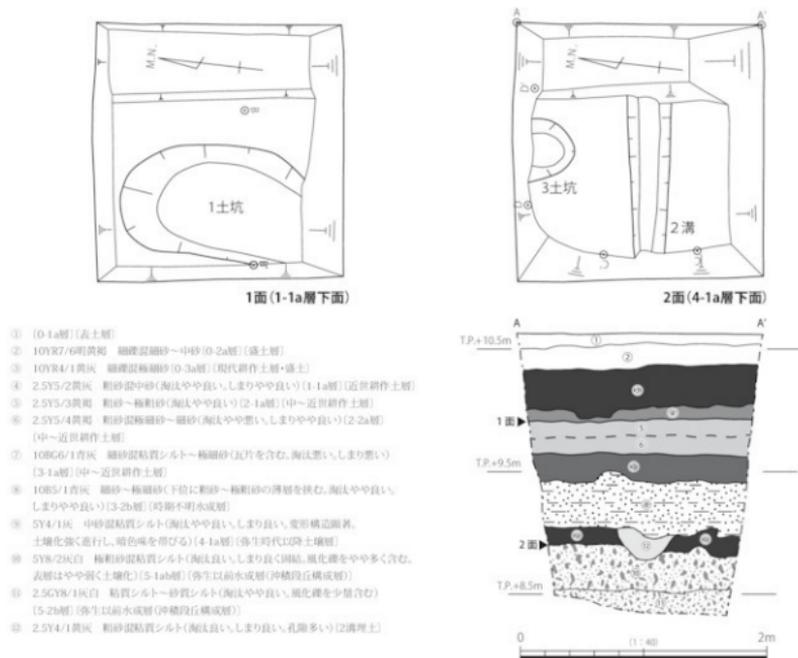


図7 1・2面平・断面図(茨木遺跡 2017-2)

第3章 調査の成果

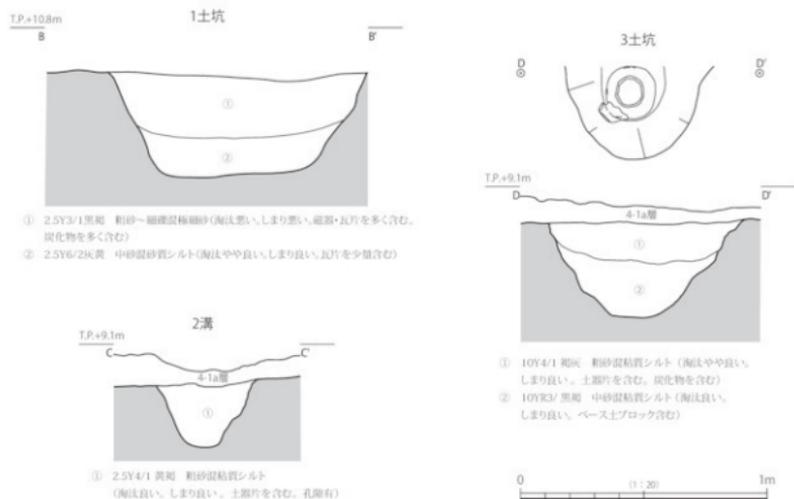


図8 遺構断面図(茨木遺跡 2017-2)

1層：近世に帰属する可能性のある耕作土層（1-1a層）

2層：中世～近世に帰属する可能性のある耕作土層（2-1a～2-2a層）

3層：中世に帰属する可能性のある耕作土層及びその母材となる水成層（3-1a・3-2b層）

4層：弥生時代以降に形成された土壌層（4-1a層）

5層：沖積段丘構成層の可能性のある土壌・水成層（5-1ab・5-2b層）

なお、このうち4層については、後述するように弥生時代前期末～中期以降に帰属する地層と考えられるが、その他の地層では、帰属時期の比定に有効な遺物が出土していない。そのため、いずれの層についても形成時期は想定域を超えるものではないことを付言しておく。以上の地層の堆積状況を確認したのち、合計2面の遺構面について面的な調査を行った。

遺構・遺物 1面は1-1a層下面、2面は4-1a層下面を調査の対象として調査を行った。なお、4-1a層の上面は水成堆積物でおおわれており、旧地表面が良好に遺存していたため、4層上面においても平面的な精査を行ったが、遺構・遺物ともに確認できなかったためここには掲げていない。調査の結果、1面では近世期の土坑を確認したほか、3面では弥生時代前期末～中期にかけての土坑や溝を検出するに至った。

1面で検出した1土坑は、検出面からの深さ0.4m程度の平面長楕円形の土坑である。南端は調査区外に伸びているため、全容は明らかでない。土坑内からは、多量の瓦・陶磁器片が出土しており、廃棄土坑としての性格が窺われる。図9には1土坑から出土した遺物の一部を掲げた。肥前磁器には染付小碗(1)、コンニャク印判皿(2)、染付蓋(3)がある。4は備前摺鉢、5はコビキBの丸瓦である。いずれも18世紀代のものとみられ、茨木遺跡周辺に展開する近世在郷町に関連する遺構の可能性が高いと考えられる。

2面では、溝1条(2溝)と土坑1基(3土坑)を検出した。2溝は東西方向に直線的に延びる溝で、

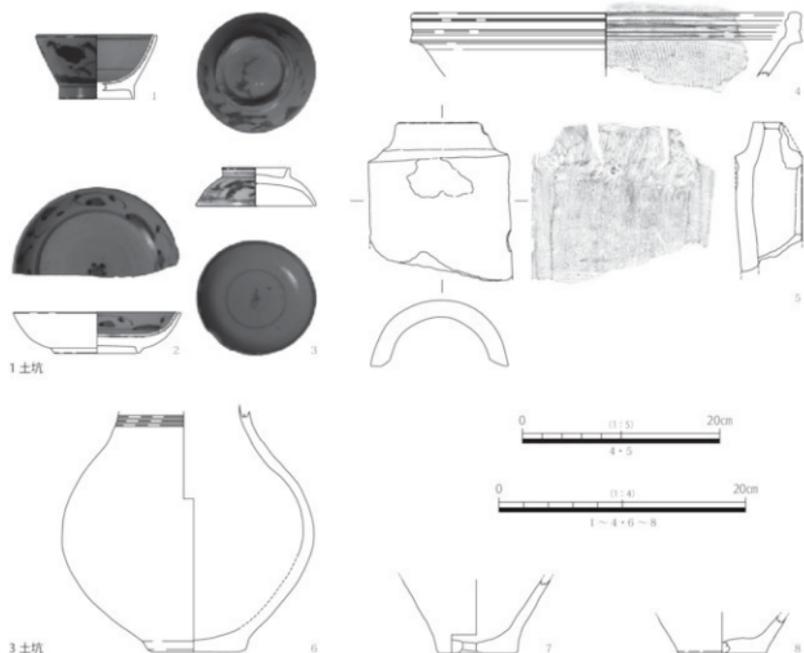


図9 出土遺物実測図（茨木遺跡 2017-2）

検出面からの深さは0.25 m程度、幅0.35 m以内の小ぶりなものである。遺物は出土していないため、遺構の帰属時期は判然としませんが、溝内の埋土は概ね3土坑に近似する層相を示すことから、本溝の帰属時期については、弥生時代前期末～中期に帰属するものと考えられる。

3土坑は直径約0.5 m、検出面からの深さ約0.4 mの土坑である。調査区の北端に延びているため遺構の平面形の全容は不明である。本土坑内からは、弥生土器壺及び甕の底部片が出土した。これらの土器は図8に示すように、壺は正位置に据え置かれたような状態で、また甕はあたかもずり落ちたかのように底部を上にして壺の肩部に沿って出土した。以上のことから土器棺葬等の性格を想定して、壺内の土壌についてはこれを慎重に取り除くとともに、土壌の水洗選別も行ったが骨片等は認められなかった。

壺（6）は頸部以上を欠く広口壺である。やや突出する底部から球形の体部を経てやや直立気味に立ち上がる頸部へといたる。頸部の直下には二条の沈線が施される。甕（7・8）は2点確認できた。うち1点の7は、底部に円孔を穿つ甕形土器である。いずれも弥生時代前期末～中期初頭（摂津Ⅰ-4～Ⅱ-2期）の所産と考えられる。

まとめ 今次調査において特筆すべき事項としては、3土坑より弥生時代前期末～中期にかけての広口壺が出土したことが挙げられる。周辺域では弥生時代の遺構・遺物の検出事例が稀少であることから、貴重な知見を加える結果となった。周辺域での調査に際しては、当該土壌層の確認等についても注意が必要であるとともに、今回の調査結果については、周辺のデータの蓄積を俟って慎重に判断したい。

4. 茨木遺跡 2017-3 (図3・10)

調査地 大手町1702番3

調査期間 平成29年5月16日

調査面積 4㎡

調査担当 正岡大実

はじめに 大手町において計画された個人住宅の建設に伴い、当該建築物の建設予定地内東半部に2×2mのトレンチを1箇所設定して確認調査を行った。調査地の現況地盤は、南面する道路面とほぼ同一である。

基本層序 今次調査で得られた基本層序は、図10のとおり大別6層、細別9層に区分できる。以下に大別層の概要を記す。

- 0層：盛土・近～現代耕作土層 (0-1a～0-3a層)
- 1層：近世に帰属する可能性のある耕作土層 (1-1a層)
- 2層：中世に帰属する可能性のある耕作土層 (2-1a層)
- 3層：中世以前に帰属する可能性のある土壌層もしくは水成層 (3-1ab層)
- 4層：中世以前に帰属する可能性のある水成層 (4-1b・4-2b層)
- 5層：沖積段丘構成層の可能性のある水成層 (5-1ab層)

遺物は出土していないため、いずれの層準の帰属時期も層相から推測された想定に過ぎないが、このうち、5層は極めて良く固結しており、最終のベース面となる層準である可能性が高いと考えられる。

遺構・遺物 調査では、2層下面(2-1a層下面)および3層下面(4-1b層下面)、5層上面(5-1ab層上面)の3面について面的な調査を行ったが、遺構・遺物などの埋蔵文化財は確認できなかった。

なお、今回の調査では、西壁面で1層下面に属する深い杭跡状の落ち込みを断面上で確認した。これについては、サブトレンチの設定箇所であったことと、損壊深度が異なる西側に該当していたため、面的な確認は成し得ていない。本落ち込みからは、遺物も出土していないため詳細は明らかでないが、層相から近代以後に帰属する可能性が高いと判断される。

また、今回の調査では5層とした沖積段丘構成層の存在を確認した。周辺の調査では条件的に4層とした河川性の氾濫堆積物と目される水成堆積物までの確認にとどまらざるを得ない事情もあるものの、今回確認した段丘構成層の存在も考慮に入れる必要がある。

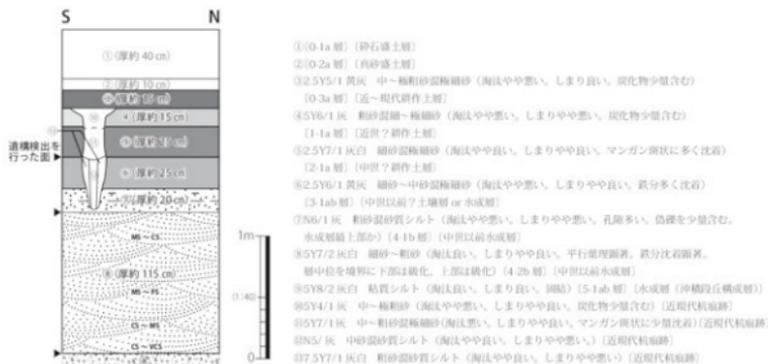


図10 断面柱状図 (茨木遺跡 2017-3)

6. 茨木遺跡 2017-6 (図3・12)

調査地 片桐町1079番2

調査期間 平成29年7月11日

調査面積 6㎡

調査担当 坂田典彦

はじめに 片桐町において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内で東西に長い2×3mの調査トレンチを1箇所設定して確認調査を行った。調査地の現況地盤は東面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 今回の調査では、現況地盤から-1.8mの深度まで確認した。遺構面精査は2面で実施し、1面は中近世の遺構を対象とした1-2a層上面、2面は砂層および自然堆積層下面(2-2b層下面)でおこなった。

遺構・遺物 結果、今回のトレンチ内では遺構は認められなかった。また、2-1b層・2-2b層は、茨木城にともなう堀の埋土・堆積土の可能性も考えられるが、今回の調査地では明確にできなかった。

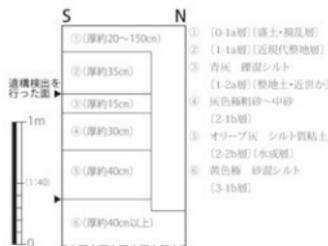


図12 断面柱状図(茨木遺跡 2017-6)

7. 上中条遺跡 2017-1 (図3・13)

調査地 上中条二丁目40番3

調査期間 平成29年6月20日

調査面積 6㎡

調査担当 木村健明

はじめに 上中条二丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、当該建築物の建設予定地内に2×3mの調査区を設定し、確認調査を行った。調査地の現況地盤は北面及び西面する道路面から0.25m程度高くなっている。

基本層序 層序は上層から、0-1a層(盛土)、1-1a層(黒色粘質シルト・旧耕土)、2-1a層(黄灰色粘質シルト・炭化物含む)、2-1b層(灰白色微砂(にぶい黄橙色粘質シルトブロック・遺物含む))、2-2b層(褐灰色粘土)、3-1a層(黄灰色粘土・遺物含む)、3-2a層(灰色粘土)、3-3a層(灰色粘土)、4-1a層(灰色粗砂混粘土・遺物包含層)、4-2a層(灰色砂礫・直径3cm大の礫含む)、5-1a層(灰色粘土(地山))である。

遺構・遺物 3-1a層・3-2a層、4-1a層・5-1a層のそれぞれ上面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。

遺物は2-1b層・3-1a層から中世の土師器、4-1a層から弥生土器・板材が出土した。

まとめ 今回の調査地は上中条遺跡の北部に位置する。弥生時代及び中世の遺物は出土したが、細片であるため、図化することはできなかった。上中条遺跡の北部は未だ様相が不明な部分が多く、今後の調査による部分が多い。

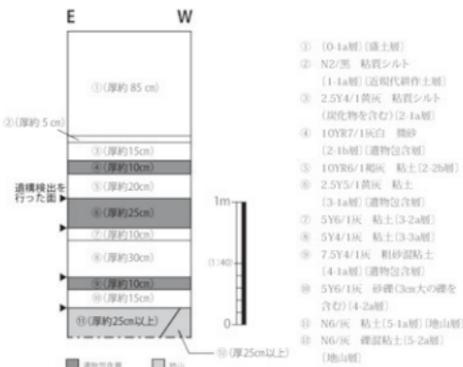


図13 断面柱状図(上中条遺跡 2017-1)

第2節 郡遺跡・倍賀遺跡・春日遺跡

1. 郡遺跡2016-5 (KOR16-5) (図14・16～19 図版4)

調査地 郡三丁目665番12の一部

調査面積 7.5㎡

調査期間 平成29年1月10日

調査担当 木村健明



図14 郡遺跡調査地位置図



図15 郡遺跡・倍賀遺跡・春日遺跡調査地位置図

はじめに 郡三丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に 2.5×3 mの調査区を設定し、本発掘調査を行った。



図 16 調査区配置図 (都遺跡 2016-5)

基本層序 現地表面の標高は T.P.+23.5 mである。層序は、上層から 0-1a 層 (盛土・層厚 0.25 m)、1-1a 層 (黄灰色粗砂混じり粘質シルト・旧耕土・層厚 0.1m)、2-1b 層 (明黄褐色粘土と灰白色粘土・地山) である。

遺構・遺物 2-1b 層上面 (T.P.+23.9 m) でピット 5 基、溝 3 条を検出した。SP1 は直径 0.25 m、深さ 0.23 m、SP2 は直径 0.4 m、深さ 0.06 m、土師器皿 1 点が出土した。9 は口径 7.1cm、器高 0.8 cmを測る。底部から短い口縁部が立ち上がる。小片かつ 1 点のみの出土であるため確実な年代を判断しがたいが、14 世紀頃の可能性がある。

各遺構の規模は、SP3 (直径 0.26 m・深さ 0.06 m)、SP4 (0.4 m・深さ 0.12 m)、SP5 (直径 0.22

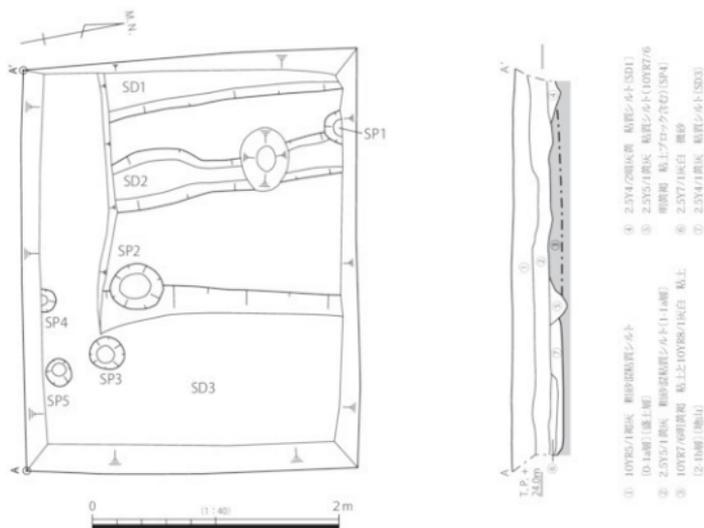


図 17 1 面平・断面図 (都遺跡 2016-5)

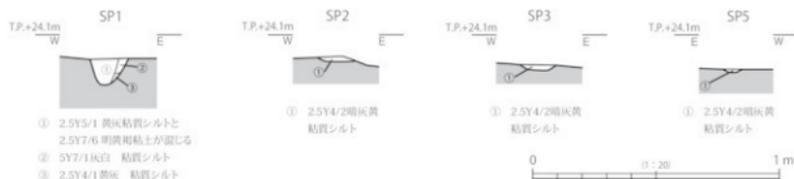


図 18 遺構断面図（郡遺跡 2016-5）

m・深さ 0.03 m) を測る。SP2 ～ 5 はいずれも深さが浅いが、これは地表面から遺構検出面までが 0.35 m と極めて浅かったことを考えると、後世の耕作などによって削平を受けていると思われる。

SD1 ～ 3 はいずれも南北方向に延びる溝である。SD1・2 は平行して延び、共に幅 0.4 m、深さ 0.04 m を測る。SD3 は東肩が調査区外に延びるため、全容は不明である。幅 1.2 m 以上、深さ 0.07 m を測る。

まとめ 今回の調査地では、現況地盤から -0.35 m の深度で地山面に到達し、遺構を検出した。極めて浅い深度での検出であることから、今回の調査地周囲は、後世に削平の影響を受けている可能性が高いと思われる。

図 19 遺物実測図
(郡遺跡 2016-5)

2. 郡遺跡 2017-2 (図 14・20・21 図版 5)

調査地 郡三丁目665番10

調査面積 4㎡

調査期間 平成29年5月25日

調査担当 正岡大実

はじめに 郡三丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内北端付近に 2 × 2 m のトレンチを 1 箇所設定して確認調査を行った。調査地は西側が高い傾斜地に位置しており、調査地点の現況地盤は東面する道路面より 0.2 m 程度高い。調査の結果、耕作土層・土壌層・段丘構成層などの各地層が良好に遺存することを確認するとともに、遺構を検出するに至ったため、本発掘調査を実施した。

基本層序 今次調査の基本層序は、図 20 のとおり大別 4 層、細別 5 層に区分できる。遺物は出土していないため、いずれの帰属時期も層相から推測されたものに過ぎないが、以下に大別層の概要を記す。

0 層：盛土層 (0-1a・0-2a 層)

1 層：中～近世に帰属する可能性のある耕作土層 (1-1a 層)

2 層：中世に帰属する可能性のある耕作土層 (2-1a 層)

3 層：段丘構成層の可能性のある中世以前の水成層 (3-1b 層)

遺構・遺物 以上の地層の堆積状況を確認したのち、2 層下面において平面精査を行ったところ、溝 1 条、土坑 2 基を検出した。

1 土坑は、調査区外に延びているため全容は不明である。検出面からの深さ 0.15 m の浅いものであり、その大半を 2 層の削平によって欠失しているものと考えられる。2 土坑は、3 溝と重複関係にある土坑であり、検出面からの深さ約 0.45 m とやや深い土坑である。周辺には 2 層が遺存していなかったため詳細は明らかではないが、2 層の形成よりも新しい時期の遺構の可能性がある。

3 溝は東西方向に直線的に延びる溝で、検出面からの深さ約 0.15 m を測る浅いものである。

各遺構の時期は、先にも述べたとおり遺物が出土していないため明らかではない。しかしながら、層



図20 調査区配置図(都遺跡2017-2)

相から、2層は中世に形成された層準の可能性が高いと推測できることに加え、細片であったため取り上げには至らなかったものの、溝内からは中世に帰属する可能性のある土師器片が認められたこと等から、本遺構の時期は概ね中世の範疇に収まるものと考えられる。また、隣接地での調査となる都遺跡2016-5 (KOR16-5) (前項)での出土遺物(9)も、この想定の前証として良いと考える。

まとめ 周辺域では遺構・遺物の検出事例が希少であるが、現況地盤から比較的浅い水準(0.4~0.7m)で遺構を検出できる可能性が高いことが判明した。後世の耕作等による削剥が及ばなかった地点では、遺構が検出できる可能性が高いことが窺われる。

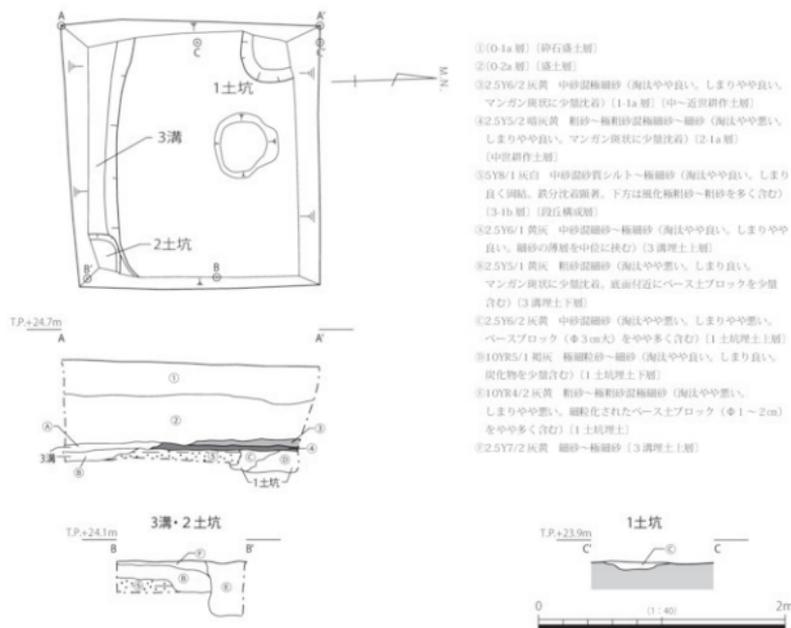


図21 平・断面図(都遺跡2017-2)

3. 郡遺跡 2016-7 (KOR16-7) (図 15・22・23 図版 6)

調査地 上穂積二丁目552番5

調査面積 5㎡

調査期間 平成29年2月10日

調査担当 藤田徹也・黒田昂嗣

はじめに 上穂積二丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×2.5mの調査区を設定して本発掘調査を行った。

基本層序 層序は上層から0-1a層(盛土・層厚0.4m)、1-1a層(暗灰黄色砂質シルト・旧耕土・層厚0.15m)、1-2a層(黄褐色粘質シルト・床土・層厚0.06~0.12m)、2-1a層(黄灰色細砂~粘質シルト・直径2cm大の礫混・層厚0.14m)、2-2a層(浅黄色細砂粘質シルト・ベース層)である。

遺構・遺物 5層上面(T.P.+16.75m)で平面精査を行った結果、調査区の西側は既に攪乱を受けていた。東側では、ビット1基(SP1)、土坑2基(SK1・2)を検出した。SP1は直径0.2m、深さ0.04mを測る。SK1の東側は調査区外に延びる。長径0.6m・短径0.2m・深さ0.1mを測る。SK2の西側は攪乱により破壊されている。長径0.6m・短径0.2m・深さ0.1mを測る。今回の調査では遺物は出土していない。

まとめ 今回の調査では、現地表下0.7mで遺構を検出した。遺物が出土していないため、それぞれの遺構の所属時期は不明である。



図22 調査区配置図(郡遺跡 2016-7)

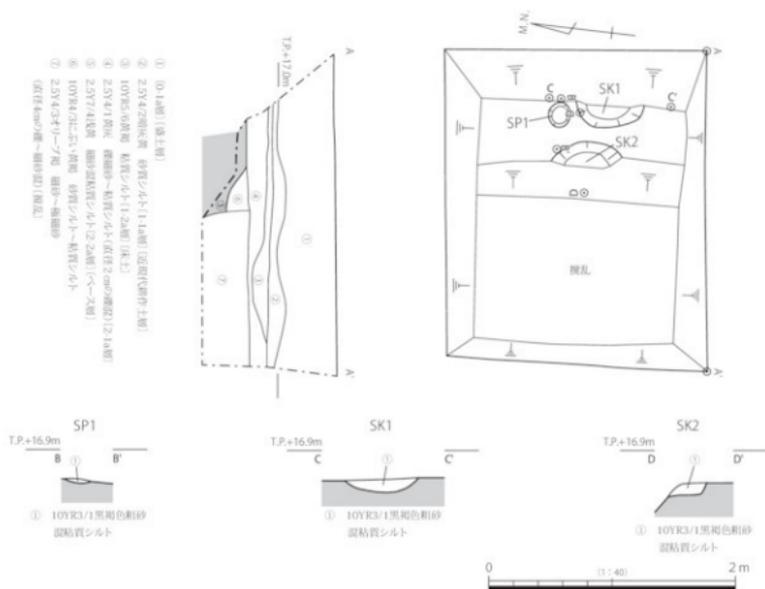


図23 平・断面図(郡遺跡 2016-7)

4. 郡遺跡 2017-1 (図 14・24)

調査地 五日市緑町730番3、730番4

調査面積 9㎡

調査期間 平成29年4月19日

調査担当 坂田典彦・富田卓見

はじめに 五日市緑町で計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に1箇所のトレンチを設定し確認調査を行った。なお、当該地の現況地盤高は、盛土のため周囲より0.8mほど高い。

基本層序 調査の結果、現況地盤-2.2mの範囲において、現況地盤-1.95mにて遺物包含層を確認した。基本層序は4層に大別でき、上層より0層：盛土・攪乱、1層：旧耕作土・整地土、2層：遺物包含層、3層：水成堆積の構成である。

遺構・遺物 今回の設計深度が現況地盤-2.0mであったため、平面精査は2層上面で実施し、その後一部分のみを掘り下げて下層確認を実施した。平面精査の結果、遺構は認められなかったが、下層確認では2層中より須恵器、土師器等の細片が出土した。図示し得なかったが、東播系須恵器甕と思しき破片を含むことから、2層は中世以後に堆積した地層と考えられる。

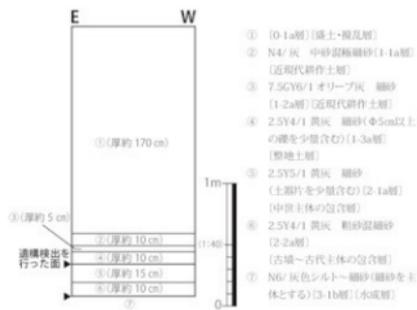


図 24 断面柱状図 (郡遺跡 2017-1)

5. 倍賀遺跡 2017-5 (図 15・25～27 図版 7・8)

調査地 春日五丁目42番1

調査面積 6㎡

調査期間 平成29年11月15日

調査担当 富田卓見

はじめに 春日五丁目で計画された個人住宅建設に伴い、建設予定地内に2×3mのトレンチを設定し、確認調査を行った。調査の結果、現況地盤-0.7mにて遺構を確認するに至ったため、本発掘調査を実施した。なお、調査地の現況地盤は西面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 基本層序は3層に大別でき、0層：現代盛土(層厚0.5m)、1層：旧耕土・整地土(層厚0.2m)、2層：地山層(上面が遺構面)である。近隣の既往調査では1層直下にて土壌化層(遺物包含層)を確認しているが、今次調査では確認されず、削平を受けたと思われる。また、既存の建物によって、調査区内の北側3分の1ほどが遺構面よりも深く掘削されていた。

遺構・遺物 今次調査で確認した遺構は、落ち込み2箇所・ピット8基である。特筆すべきは調査区西半にて検出した1落ち込みで、規模は幅1.7m以上・長さ1.2m以上・深さ0.8mを測る。遺構の断

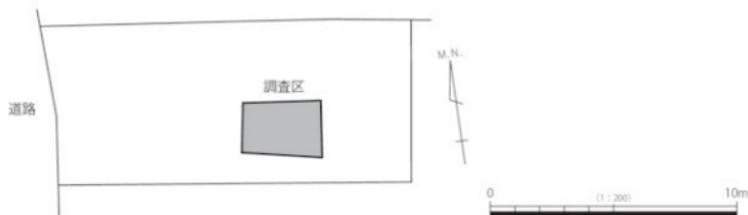


図 25 調査区配置図 (倍賀遺跡 2017-5)

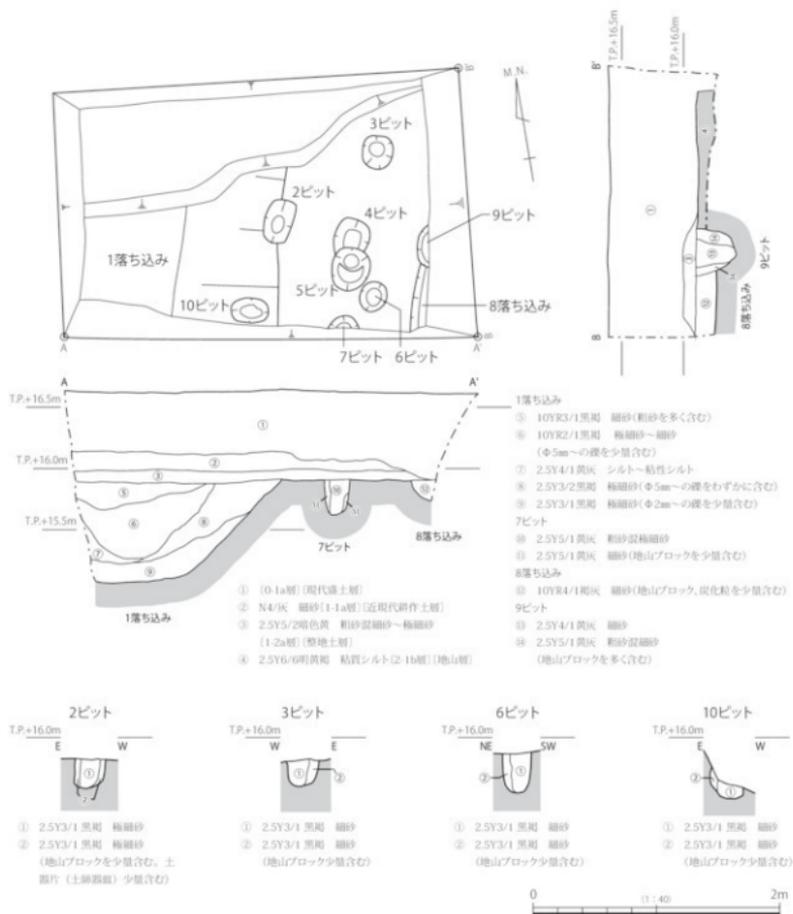


図 26 平・断面図(倍賀遺跡 2017-5)

面形はV字状の鋭角な掘り込みで、平面プランはほぼ南北方向に延びている。遺構上層断面の状況や平面形状から、本落ち込みについては溝の可能性が考えられるが、今次調査で確認できた掘り方は東側上端のみの検出に留まったため、慎重を期して落ち込みと呼称した。南東角で検出した8落ち込みについても、前述と同じ理由で落ち込みとしている。1落ち込み内からは、後述する韓式系土器片と土師器の細片が出土した。また、本遺構に重複する2ピットからは、中世に帰属するとみられる土師器皿が出土している。以上のことから、1落ち込みは古墳時代に帰属する遺構の可能性が高い。

今次調査ではこのほかにピットを複数検出したが、いずれも埋土の層相は前述の2ピットと近似した内容を示している。詳細は不明であるものの、いずれも中世に帰属する可能性が高いと考えられよう。

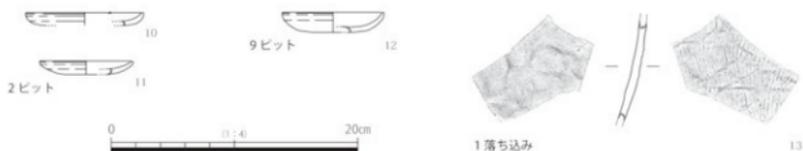


図 27 遺物実測図（倍賢遺跡 2017-5）

図 27 には各遺構から出土した土器のうち、図示可能なものを示した。10～12 は各ピットから出土した土師器皿である。いずれも細片であるため、詳細な帰属時期は明らかにし難いが、13 世紀代の所産と考えられる。13 は韓式系土器（陶質土器）の甕形土器の体部片である。焼成は極めて堅緻で、器表面にはいわゆる「鳥足文タタキ目」が良好に遺存する。5 世紀前半の所産とみられる。

まとめ 今次調査地の周辺ではこれまで断続的に調査が行われており、現況地盤から概ね 1.0 m 以内の比較的浅い深度において遺構・遺物が確認されている。今次調査においてもこうした既往の調査成果を追認することとなったが、韓式系土器の出土を確認したことは特筆すべき成果といえるだろう。今回の成果の詳細な位置づけは、周辺域における調査の追加をまって慎重に判断する必要があるが、重要な知見を加えることができたと考えられる。

6. 春日遺跡 2016-6 (KSG16-6) (図 15・28・29 図版 9)

調査地 春日二丁目188番8、188番17

調査面積 7.5㎡

調査期間 平成29年2月27日

調査担当 木村健明

はじめに 春日二丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、2.5 × 3 m の調査区を設定し、本発掘調査を行った。

基本層序 現地表面の標高は T.P.+16.3 m である。層序は上層から、0-1a 層（盛土・層厚 0.7 m）、1-1a 層（黄灰色微砂混じり粘質シルト・層厚 0.2 m）、2-1a 層（黒色粘質シルト・層厚 0.06 m）、3-1a 層（灰オリーブ色粘土（粘性強）・第 1 面ベース層・層厚 0.2 m）、4-1a 層（灰白色粗砂混じり粘質シルト・第 2 面ベース層・層厚 0.25 m）、5-1b 層（灰白色細砂～粗砂・層厚 0.18 m）、5-2b 層（灰白色粗砂・層厚 0.2 m）、5-3b 層（灰色粗砂・層厚 0.3 m 以上）である。

遺構・遺物 第 1 面では、ピット 4 基を検出した。SP1 は長径 0.6 m、短径 0.4 m、深さ 0.04 m を測る。SP2 は長径 0.6 m、短径 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。SP3 は長径 0.6 m、短径 0.3 m、深さ 0.04 m を測る。SP4 は長径 0.3 m 以上、短径 0.3 m、深さ 0.18 m を測る。埋土はいずれも暗灰黄色粘土ブロックの混じる黒褐色粘土である。

第 2 面では、調査区北西隅で落ち込みを確認した。埋土は 4 層と同じであった。

今回の調査では、遺物は出土していない。

まとめ 今回の調査では遺物が出土しておらず、検出した遺構の時期は不明である。平成 14 年度に実施された、調査区東側の共同住宅建設時の調査では、古墳時代及び中世の遺構が検出されている。そのため、今回の調査で検出した遺構も、いずれかの時期の可能性がある。

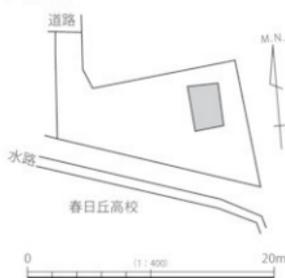


図 28 調査区配置図
(春日遺跡 2016-6)

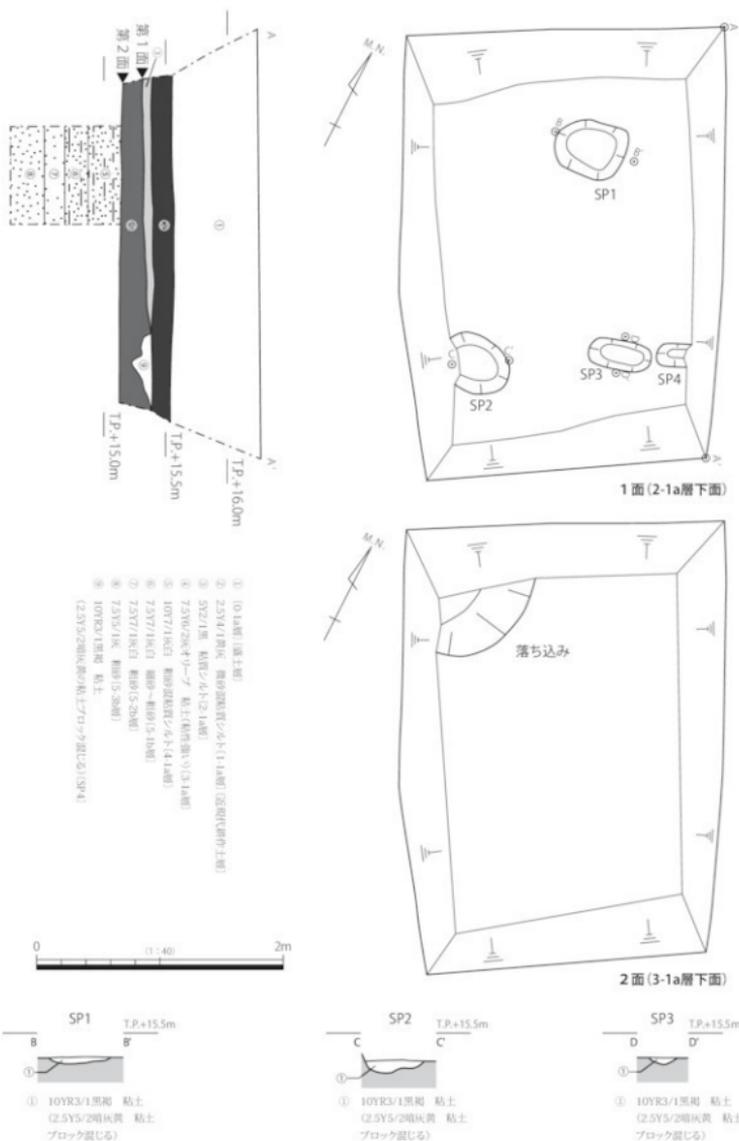


図29 平・断面図(春日遺跡 2016-6)

第3節 東奈良遺跡・沢良宜城跡

1. 東奈良遺跡 2017-3 (図 30・32)

調査地 沢良宜西二丁目119番6

調査面積 4㎡

調査期間 平成29年5月11日

調査担当 正岡大実

はじめに 沢良宜西二丁目にて計画された個人住宅建設に伴い、2×2mのトレンチを建設予定地内東側に1箇所設定して確認調査を実施した。調査地の現況地盤は、隣接道路面とほぼ同一であり、調査地内は概ね平坦である。調査の結果、耕作土層・水成層などの各地層が良好に遺存することを確認した。

基本層序 今次調査の基本層序は、図32のとおり大別7層、細別14層に区分できる。遺物が出土しなかったため、各層の帰属時期は層相から推測されたものに過ぎないが、以下に大別層の概要を記す。

0層：盛土・現代耕作土層 (0-1a・0-2a層)

1層：中世～近世に帰属する可能性のある耕作土層 (1-1a・1-2a層)

2層：中世～近世に帰属する可能性のある耕作土層及び母材となる水成層 (2-1a～2-3b層)

3層：中世に帰属する可能性のある耕作土層及び母材となる水成層 (3-1a～3-3b層)

4層：中世に帰属する可能性のある耕作土層 (4-1a層)

5層：沖積段丘構成層の可能性のある水成層 (5-1b層)

6層：沖積段丘構成層の可能性のある土壌層及びその母材となる水成層 (6-1a・6-2b層)

このうち、5層以下の層準は極めて良く固結しており、最終のベース面となる層である可能性が高い。

遺構・遺物 調査では4層(4-1a層)下面において面的な調査を行ったが、遺構・遺物などは確認できなかった。なお、今次調査区の東側では2015年度に本発掘調査を実施しており(HN15-13)、当該調査では、中世の居住域が確認されている。当該調査においては調査区の西端付近で幅広の溝が認め



図30 東奈良遺跡・沢良宜城跡調査地位置図



図31 東奈良遺跡調査地位置図

られていたことから、今次調査の成果によって、溝の西側における土地利用の在り方を検討するうえで重要な知見を得ることができたものといえる。

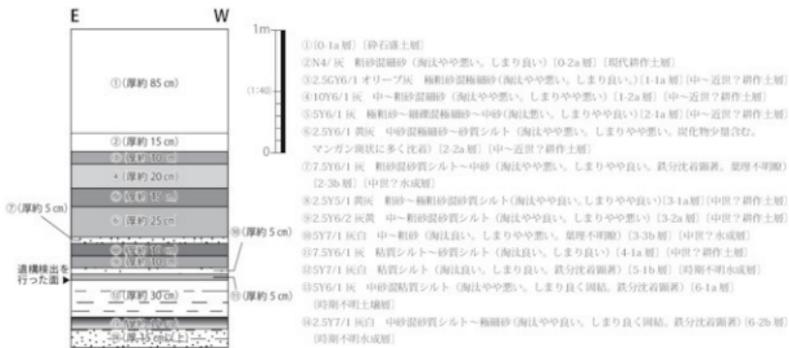


図 32 断面柱状図(東奈良遺跡 2017-3)

2. 東奈良遺跡 2017-6 (図 31・33)

調査地 東奈良一丁目657番4

調査面積 6㎡

調査期間 平成29年9月19日

調査担当 木村健明

はじめに 東奈良一丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×3mの調査区を設定して確認調査を行った。調査地の現況地盤は東面・北面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 層序は上層から、0-1a層(盛土)、1-1a層(旧耕土)、2-1a層(緑灰色粗砂混じり粘質シルト)、2-2a層(オリーブ灰色粗砂混じり粘質シルト)、2-3a層(灰色粘質シルト)、3-1a層(灰色粘質シルト)、4-1b層(灰色粘質シルト混じり粗砂)、4-2b層(灰色粗砂混じり粘質シルト)、5-1a層(灰色粘土)、5-1b層(灰色微砂)、6-1a層(黒色粘土)である。11層は湧水が激しかったため、上面を確認したのみである。また、5層と6層の間で鉄分が層境に沈着していることを確認した。しかし、いずれの層も水平に堆積していることを確認したため、面としての検出は行っていない。

遺構・遺物 調査の結果、遺構・遺物は確認できなかった。

まとめ 今回の調査地は東奈良遺跡の北部に位置する。調査地周辺は遺構深度が深く、面積の限られた個人住宅建設に伴う調査では様相の確認が困難である。東側70mに位置する府営住宅の調査では、主に現地地表下約-2.7m～約-3.2mにかけて中世水田が検出されており、当地周辺にも同様の景観が広がっていたものと思われる。

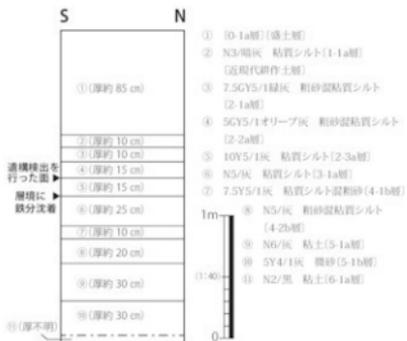


図 33 断面柱状図(東奈良遺跡 2017-6)

3. 東奈良遺跡 2017-7 (図 30・34)

調査地 沢良宜西二丁目502番の一部

調査面積 6㎡

調査期間 平成29年9月22日

調査担当 木村健明

はじめに 沢良宜西二丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×3mの調査区を設定し、確認調査を行った。

基本層序 層序は上層から、0-1a層(盛土)、1-1a層(旧耕土)、1-2a層(灰白色粗砂・)、2-1b層(暗オリーブ色粗砂混じり粘質シルト)、2-2b層(灰色粘質シルト混じり粗砂・ラミナあり)、2-3b層(明オリーブ灰色粘質シルト混じり粗砂・ラミナあり)、2-4b層(灰色粘質シルト混じり粗砂・ラミナあり)、2-5b層(灰色粘質シルト混じり粗砂・ラミナあり)である。総体として、粘質シルト混じり粗砂層が主体である。

遺構・遺物 今回の調査では、遺構・遺物を確認することはできなかった。

まとめ 北東に約100m離れたHN13-1及びHN15-13の調査では、現地表下1.5m付近で中世を主体とする遺構が検出されている。しかし、今回は遺構面を検出することができなかった。また、『新修茨木市史』地理編では、今回の調査地は沢良宜西の小字「垣内」に所在する。少なくとも近代以降には宅地であったようである。しかし、今回の調査結果からは、時期は限定できないが、ある時期までは流路内に位置していたと思われる。

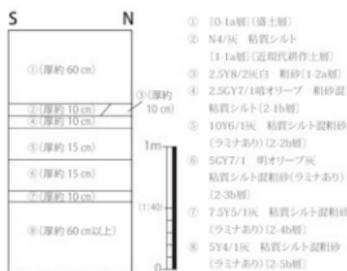


図 34 断面柱状図(東奈良遺跡 2017-7)

4. 沢良宜城跡 2017-1 (図 30・35)

調査地 美沢町475番93

調査面積 6㎡

調査期間 平成29年8月17日

調査担当 木村健明

はじめに 美沢町において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×3mの調査区を設定して確認調査を行った。調査地の現況地盤は西面する道路から1.1m程高く、東側の隣地からは70cm程低くなっている。

基本層序 層序は上層から、0-1a層(盛土・造成土・黄褐色粗砂)、0-2a層(盛土、改良剤のブロック・瓶・コンクリート等を含む)、1-1a層(緑灰色粗砂)である。

遺構・遺物 今回の調査では、遺構・遺物ともに検出することはできなかった。0-1a層は宅地造成に伴う造成土、0-2a層はそれ以前の造成土ないし埋め戻し土と考えられる。

まとめ 今回の調査地と東側の宅地が所在する桜通り沿いの南北方向の住宅地は、いずれも今回の調査地の西側を通る道路よりも高くなっている。これは、元茨木川の堤防と関連する可能性が考えられる。調査地周辺の現況は、近年の盛土によって、著しい改変を受けていることが窺われる。

図 35 断面柱状図
(沢良宜城跡 2017-1)

第4節 牟礼遺跡

1. 牟礼遺跡 2016-7 (MUR16-7) (図 36・37)

調査地 岡田町754番6

調査面積 6.25㎡

調査期間 平成29年1月26日

調査担当 黒田昂嗣

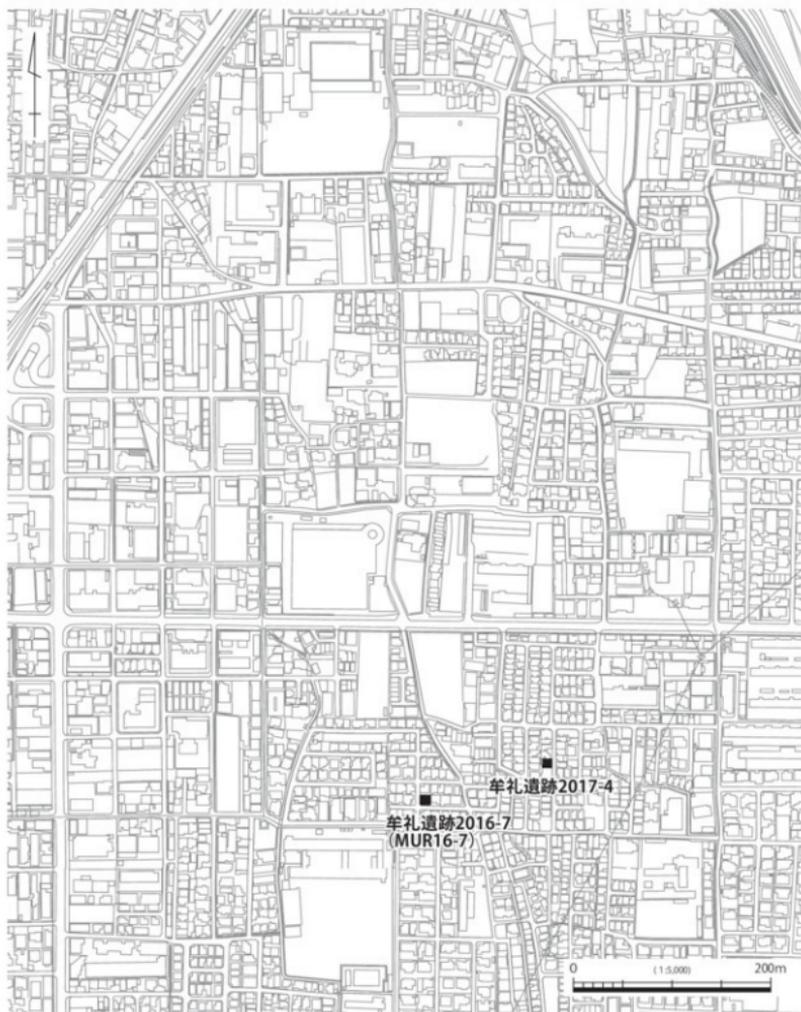


図 36 牟礼遺跡調査地位置図

はじめに 園田町において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2.5 m四方の調査区を設定し、確認調査を行った。

基本層序 層序は上層から、0-1a層（盛土層）、1-1a層（暗青灰色粘質シルト～砂質シルト・近現代耕作土層）、2-1a層（青灰色粘質シルト～砂質シルト（整地土層））、3-1a層（褐色中砂混じり粘質シルト・整地土層?）、4-1b層（黄灰色粗砂混じり細砂）である。

遺構・遺物 3-1a層上面及び4-1b層上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。今回の調査では、遺物は出土していない。また、湧水で壁面が崩落したため、現況地盤から-2.4 m以下の深度の様相については確認を行うことができなかった。

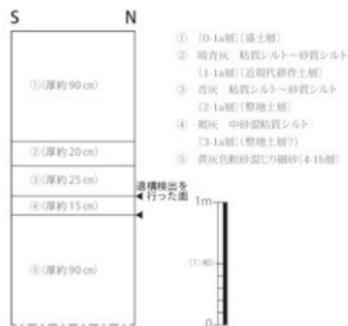


図 37 断面柱状図 (牟礼遺跡 2016-7)

2. 牟礼遺跡 2017-4 (図 36・38)

調査地 園田町736番5

調査期間 平成29年8月18日

調査面積 6㎡

調査担当 木村健明

はじめに 園田町において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×3 mの調査区を設定し、確認調査を行った。調査地の現況地盤は東面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 層序は上層から、0-1a層（盛土層）、1-1a層（近現代耕作土層）、2-1b層（オリーブ灰色微砂混じり粘質シルト）、2-2b層（灰オリーブ色粘土）、2-3b層（灰色粘質シルト混じり粗砂）、2-4b層（灰色粘質シルト）、3-1a層（灰色粘土・包含層）、4-1a層（灰色微砂混じり粘土）である。

遺構・遺物 包含層である3-1a層からは土師器・須臾器が出土した。南側の宅地2軒で行った調査 (MUR14-3・5) 時に検出した包含層と同一のものと考えられる。

ただし、これらの調査では包含層の厚さは0.3 m程度であったが、今回の調査では、0.4 m以上の深さが認められた。包含層ではなく、溝や落ち込みの埋土が存在する可能性もあるが、調査面積が狭小なため、それ以上は確認できなかった。

まとめ 今回の調査では、現況地盤-1.7～2.1 mの深度内において遺物包含層を確認した。周辺は既に宅地化しているため、限られた面積でしか調査を行うことができないことが多いが、今後ともデータを積み重ねていくことで、包含層の分布範囲などの情報を把握することができると考えられる。

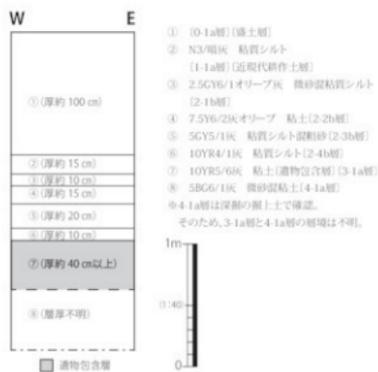


図 38 断面柱状図 (牟礼遺跡 2017-4)

第5節 耳原遺跡ほか

1. 耳原遺跡 2017-2 (図 39・40)

調査地 耳原二丁目236番6

調査面積 6㎡

調査期間 平成29年6月23日

調査担当 木村健明



図 39 耳原遺跡・五日市遺跡調査地位置図

はじめに 耳原二丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×3mの調査区を設定し、確認調査を行った。調査地の現況地盤は南面する道路面とほぼ同じである。

基本層序 層序は上層から、0-1a層(碎石)、0-2a層(盛土)、1-1a層(灰白色粗砂混じり粘質シルト・旧耕土)、1-2a層(明黄褐色粘土・床土)、2-1a層(褐灰色粘土・マンガン粒認められる)、2-2a層(黄灰色粘土・マンガン粒認められる)、3-1a層(浅黄色粘土・地山)である。

遺構・遺物 今回の調査では、遺構・遺物といった埋蔵文化財は確認できなかった。

ただし、2-1a層は遺物を確認することはできなかったが、包含層と類似した色調を呈している。また、壁面において2-1a層が落ち込んでいる部分を確認したが、平面上では明瞭な輪郭を示す部分を確認できなかった。そのため、自然の落ち込みの可能性が高いと判断した。

まとめ 耳原遺跡では、縄文時代～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。今回の調査では、遺構・遺物を確認することはできなかったが、今後も周辺の調査を継続して行っていく必要がある。



図 40 断面柱状図(耳原遺跡 2017-2)

2. 五日市遺跡 2017-1 (図 39・41)

調査地 上野町51番1の一部、52番2

調査期間 平成29年8月28日

調査面積 6㎡

調査担当 正岡大実

はじめに 上野町において計画された個人住宅の建設に伴い、当該建築物の建設予定地内中央付近に2×3mのトレンチを1箇所設定して確認調査を行った。調査地の現況地盤は、東面する道路面とほぼ同一であり、調査地内は概ね平坦である。

基本層序 調査の結果、耕作土層・水成層などの各地層が良好に遺存している状況を確認した。今次調査で確認できた基本層序は、図41のとおり大別6層、細別10層に区分できる。遺物は出土していないため、各層準の帰属時期は層相から推測された想定に過ぎないが、以下に大別層の概要を記す。

0層：盛土・現代耕作土層(0-1a・0-2a層)

1層：近世に帰属する可能性のある耕作土層(1-1a層)

2層：中世～近世に帰属する可能性のある耕作土層とその母材となる水成層(2-1a・2-2b層)

3層：中世～近世に帰属する可能性のある耕作土層とその母材となる水成層(3-1a・3-2b層)

4層：中世以前に帰属する可能性のある耕作土層とその母材となる水成層(4-1a・4-2b層)

5層：中礫以上の粗粒の礫を多数含み固結した水成層(段丘構成層?) (5-1b層)

遺構・遺物 今次調査では、遺構の検出を期して5層(5-1b層)上面で面的な調査を行ったが、遺構・遺物などの埋蔵文化財は確認できなかった。

なお、今回の調査では先述のとおり遺物が出土していないため、各層準の帰属時期は層相から推測したものであり、その詳細は明らかでない。しかしながら、今次調査で確認した地層のうち層厚の大半を占める2～4層は、葉理が顕著に発達した水成堆積物と、それを母材とした耕作土の連続によって形成されていることから、調査地周辺は基本的に氾濫堆積物の影響を受けやすい環境下にある耕作地であったことが窺われる。

まとめ 今回の調査では最終遺構面として認識した5層については、固結した層相を示すことを根拠に段丘構成層に属することを想定したが、著しい湧水と壁面の崩落のため、より詳細な検討を加えることができなかった。周辺域での調査による情報の追加をまって各地層の評価を定める必要がある。



図 41 断面柱状図 (五日市遺跡 2017-1)

3. 鮎川遺跡 2017-2 (図 42～45 図版 10・11)

調査地 鮎川二丁目68番18

調査面積 4.6㎡

調査期間 平成29年7月10日

調査担当 坂田典彦・富田卓見



図 42 鮎川遺跡調査地位位置図

はじめに 鮎川二丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、当該建築物の建設予定地内において 2×2.3 mのトレンチを建築予定地内の北部付近に1箇所設定して本発掘調査を行った。なお、調査地の現況地盤は、南に隣接する道路面とほぼ同じである。調査の結果、土壌化層と、その層中より古代・中世に帰属する土器片を確認した。また、遺構面となり得る可能性がある安定した土層を確認し、下記の3面で精査を行ったが、遺構は認められなかった。なお、3層以下の深度については、湧水が激しく、安全面を考慮し掘削を行わなかった。

基本層序 今次調査の基本層序は、4層に大別できる。以下、大別層の概要を記す。

0層：現代盛土 (0-1a層)

1層：近現代に帰属する可能性のある耕作土層 (1-1a・1-2a層)

2層：古代～中世に帰属する可能性のある土壌化層 (2-1a・2-2a層)

3層：中世以前に堆積した水成層 (3-1b層)

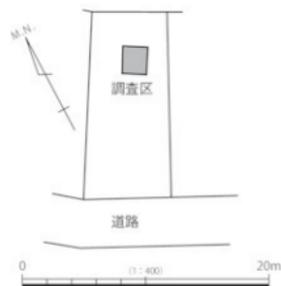


図 43 調査区配置図 (鮎川遺跡 2017-2)

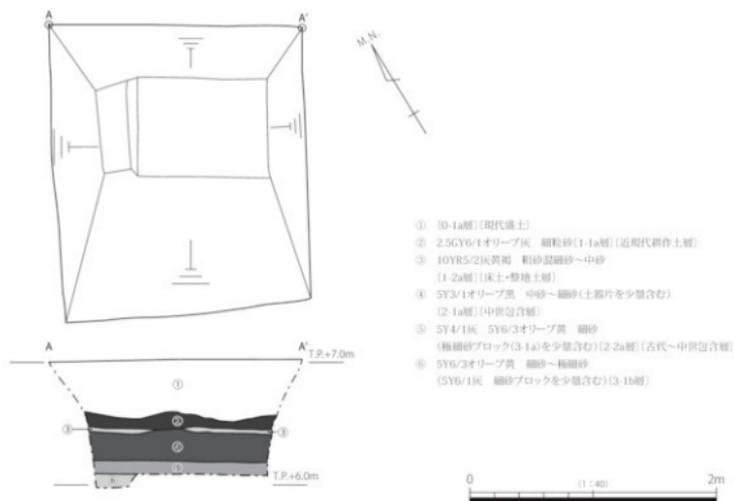


図44 平・断面図(鮎川遺跡 2017-2)

遺構・遺物 遺構平面検出は、2-1a層(1面)・2-2a層(2面)・3-1b層(3面)の各上面で実施した。しかし、いずれの面においても遺構は認められなかった。

なお、2層中からは古代～中世にかけての遺物が少量出土した。これらの遺物のうち、図示可能なものを図45に掲げた。中世の土器としては、瓦器碗(16・17)、土師器皿(15)、瓦質三足羽釜(18)がある。15の土師器皿はやや古相を示すものの、大半は13世紀後半～14世紀に帰属するものと考えられる。古代の土器としては、土師器皿(14)、黒色土器A類碗(19)、土師器羽釜(21)が挙げられる。細片のため詳細な時期は決しがたいが、9～10世紀代の所産であろうか。このほか、弥生土器(20)も出土しているが、詳細な時期は不明である。

まとめ 今回の調査では、遺構は検出し得なかったものの、2層中からは古代～中世の遺物が出土した。このことから、2層の下面である3層上面は、当該期の遺構面を形成している可能性が高い。周辺で行われた既往調査においても中世の遺構が確認されていることから、当該調査で確認した3面がそれらの遺構面に繋がるものと推測される。

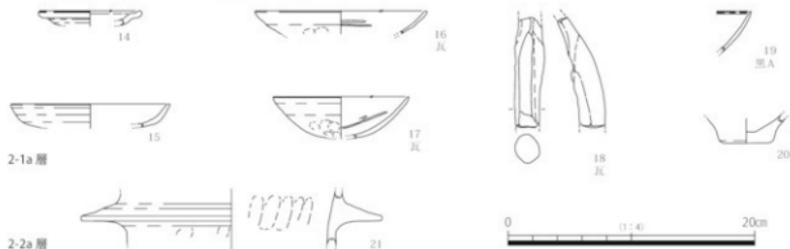


図45 遺物実測図(鮎川遺跡 2017-2)

4. 太田遺跡 2017-1 (図 46・47)

調査地 太田二丁目17番2

調査期間 平成29年7月12日

調査面積 6㎡

調査担当 高村勇士



図 46 太田遺跡調査地位置図

はじめに 太田二丁目で計画された個人住宅の建設に伴い、2m×3mのトレンチを当該建築物の建設予定地内に1箇所設定して確認調査を行った。調査地の地表面の標高は、北側の道路面とほぼ同じである。調査に当たっては、損壊深度である現地表面より-2.3mを限度とした。なお、北側の道路部分は、平成28年度に太田遺跡2016-1（以下「2016-1」という。）として本発掘調査を実施している。

基本層序 調査の結果、「図47 断面柱状図」に示した層序が観察できた。この層序は、2016-1で得られた基本層序とほぼ同様である。今次調査において確認できたのは、盛土層の崩落と掘削限度により1-2a層までであるが、2016-1の結果を参考に、層序の概要を以下に示す。

0-1a層 現代盛土層。2016-1では、東端で層厚は約0.7m、西端で約1.5mと東から西へと厚くなる。現地表面が東から西へと上っており、それは本層に起因する。

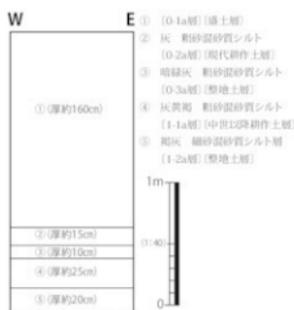
0-2a層 近現代に形成された耕作土層。

0-3a層 0-2a層に付属する層。

1-1a層 中世以降の耕作土層。

1-2a層 2016-1において古墳時代～中世の土器や直径15cm程度の鏝を含む整地土層であることを確認している。東から西へと下る斜面を、1-1a層をつくるために平坦に造成したものと考えられる。

遺構・遺物 今次調査では目立った傾斜や遺物等は確認できなかった。

図 47 断面柱状図
(太田遺跡 2017-1)

5. 西国街道 2017-2 (図 48・49)

調査地 豊川四丁目315番1

調査期間 平成29年11月9日

調査面積 6㎡

調査担当 木村健明

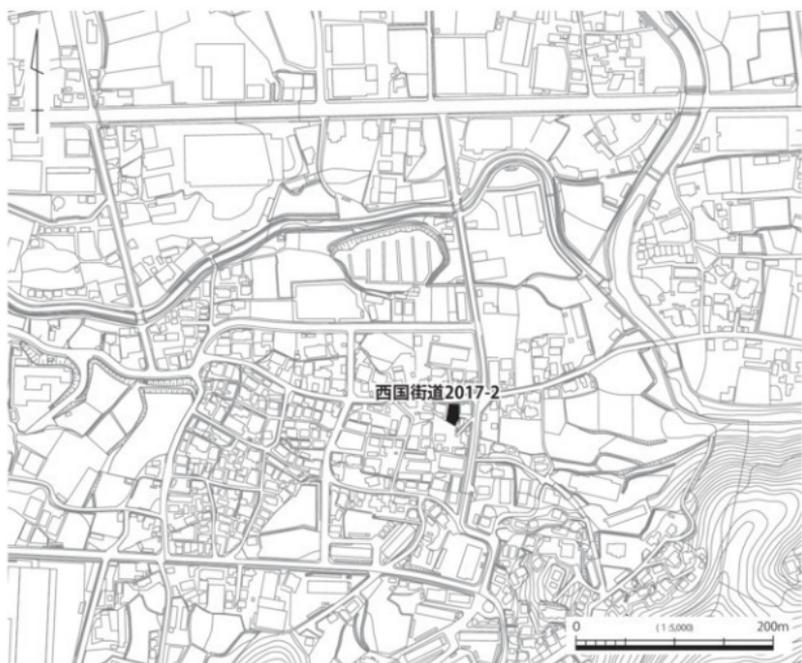


図 48 西国街道調査地位図

はじめに 豊川四丁目において計画された個人住宅の建設に伴い、建設予定地内に2×3mの調査区を設定し、確認調査を行った。

基本層序 層序は上層から、0-1a層（盛土）、1-1b層（灰白色粗砂混じり粘質シルト・地山）、1-2b層（灰白色粗砂混じり粘土）、2-1b層（灰色粗砂混じり粘土・ラミナあり）、2-2b層（褐色粗砂）である。

遺構・遺物 1-1b層上面で遺構検出を行ったが、遺構・遺物を確認することはできなかった。

まとめ 現地表面下-0.2 mにおいて、地山と考えられる1-1b層を検出した。しかし、遺構・遺物を確認することはできなかった。

今回の調査地の南側は、高さ約1.7 mの擁壁が存在する。時期は不明だが、丘陵を削平して平坦面を造成しているものと考えられる。



図 49 断面柱状図 (西国街道 2017-2)

第6節 千提寺菱ヶ谷遺跡（第四次・第五次範囲確認調査）

調査地	茨木市大字千提寺36番8
調査原因	史跡指定に向けた範囲確認調査
調査期間	第四次調査 平成29年1月23日～3月31日（千提寺菱ヶ谷遺跡2016-2）（SDH16-2） 第五次調査 平成29年11月21日～平成30年3月31日（千提寺菱ヶ谷遺跡2017-1）
調査面積	第四次調査 約236㎡（千提寺菱ヶ谷遺跡2016-2）（SDH16-2） 第五次調査 約53㎡（千提寺菱ヶ谷遺跡2017-1）
調査担当	坂田典彦

1. 調査結果

（1）調査に至る経緯と経過

本遺跡における調査の端緒および経緯は、先の第三次までの確認調査報告において詳述したため〔茨木市教育委員会 2016・2017〕、本項では時系列を列挙するかたちで略述する（以下、調査名称の「確認」を略す）。千提寺地区交流拠点広場の建設に伴いはじめて埋蔵文化財調査のメスを入れた当該地では、平成26年9月に試掘調査を実施し、同年11月に新規発見「千提寺菱ヶ谷遺跡」として周知された。これを受けて、本市教育委員会は同年11月～翌27年3月に第一次調査を実施し、以降、年に1・2回を基本として本年度までに5次に亘る調査を重ねてきた。これまでに、人骨が遺存する土坑墓や遺跡最高所で検出した大型土坑の調査をはじめ、遺跡全体を視野に入れたテラス面の形成についても確認した。また、現地での実地調査に加えて自然科学分析を実施し、先の〔茨木市教育委員会 2016〕で目標

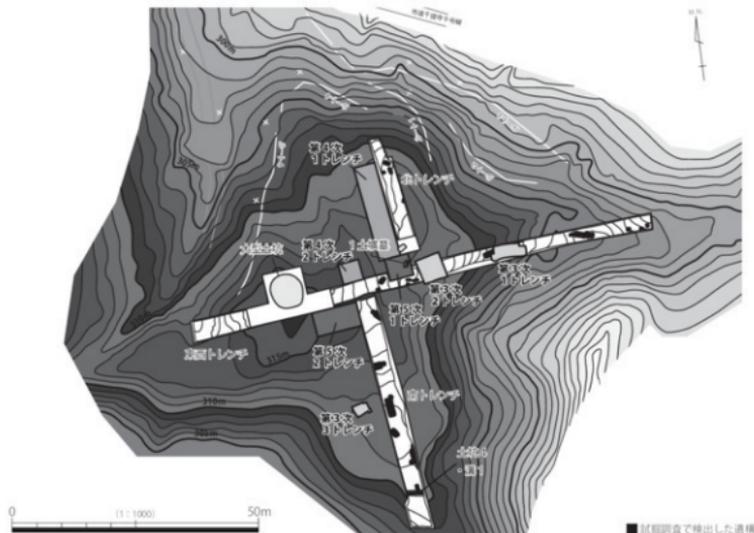


図50 トレンチ配置図・遺構配置図（千提寺菱ヶ谷遺跡）

に掲げた古環境の復元や出土人骨の年代測定など遺跡の性格を推し量るうえで、これらデータが寄与している点は大きい。また、本遺跡は平成28年1月に土地所有権が茨木市に移ったのを機に、都市公園としての位置づけを担っている。

(2) 調査の方法と目的

第四次・第五次調査は、試掘調査で検出した20基を超える遺構の内、第一次調査で人骨が出土した土坑墓周辺の未調査エリアと、南尾根筋で検出していた長方形土坑を対象にトレンチを設定した(図50)。

なお、第四次・第五次調査もこれまでと同様に、遺構の平面規模や形態を確認し、遺構の一部を掘削することによって全容を把握するという方法で実施し、向後の検証余地を残すべく未発掘部分を残すことを意識した。

(3) 調査の成果

①基本層序

基本層序は、第一・二次調査と対比させており、第三次調査と同様に詳細観察記録は〔茨木市教育委員会2016〕に委ね、ここでは基本層序の概略を再掲する。本遺跡の層序は大別で4層に分層でき、現地表面を含む表土・腐植土および試掘埋め戻し土(1層)、斜面地の表層堆積層・斜面堆積層(2層)、地山(3層、無遺物層)、そして当遺跡の基盤岩(4層、花崗岩体)である。したがって、遺構の帰属層位は3層であり、遺構面は3層上面、3層が流出している箇所では4層上面に当たる。

②遺構(図版12)

今回報告の対象とする両次の調査で検出した遺構には、第四次2トレンチの長方形土坑1基、第五次1トレンチの溝1基・土坑墓1基が主だったものであるが、ここでは第五次調査の1トレンチで検出した1土坑墓に絞って略述する。

1土坑墓 東に下る主要尾根中位付近で検出した当遺構は、標高309.6mに立地する。具体的には等高線の間隔が広がる緩傾斜面に位置する。平面形状は隅丸長方形を呈し、遺構の規模は長辺約160cm、短辺約70cmを測る。後世の検証の一助となる様に若干の調査手順を記すと、当該遺構の直上には中低木の植根による攪乱があり、当初の検出平面形は、やや大振りな長方形で主軸方位も最終結果とは異なる形状で捉えていた。掘削を進める段階で、現地表面から約60cmのレベルで寛骨(片方)と大腿骨1点が出土し、さらにその下にも骨が遺存していることを確認した。そこで、上記2点の人骨については記録調査を完了した後、取上げた。以降の調査に関しては、人骨の分析委託を含め、次年度に調査体制を整え再調査することとし、遺存する人骨を保護したうえで、一旦埋め戻した。

(4) おわりに

本遺跡の成果報告については、別途、報告する準備があり、ここでは国庫補助金を適用した実績として、昨年度末と当該年度に実施した調査成果のトピックを報告した。一方、第五次調査期間中には眼下で新名神高速道路が開通し(高槻-神戸区間)、千提寺1Cの供用開始に伴い、今まで以上に人の流入が生まれることが予測されている。今後、地元住民の理解を得ながら、遺跡の保存と活用についてより一層考えていく必要がある。

〔参考文献〕

茨木市教育委員会 2016『平成27年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報8』

茨木市教育委員会 2017『平成28年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報9』

写 真 图 版



1. 茨木遺跡 2017-2 東壁断面（西から）



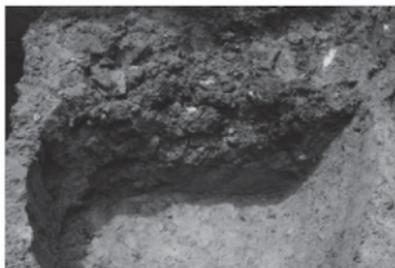
2. 茨木遺跡 2017-2 1面全景（北から）



1. 茨木遺跡 2017-2 2面全景（南から）



2. 茨木遺跡 2017-2 3土坑遺物出土状況（南から）



1. 茨木遺跡 2017-2 1 土坑断面（北から）

2. 茨木遺跡 2017-2 2 溝断面（東から）



3. 茨木遺跡 2017-2 出土遺物



1. 郡遺跡 2016-5 1面全景 (東から)



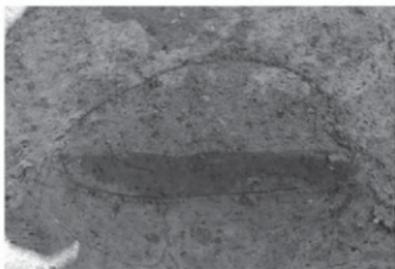
2. 郡遺跡 2016-5 南壁断面 (北から)



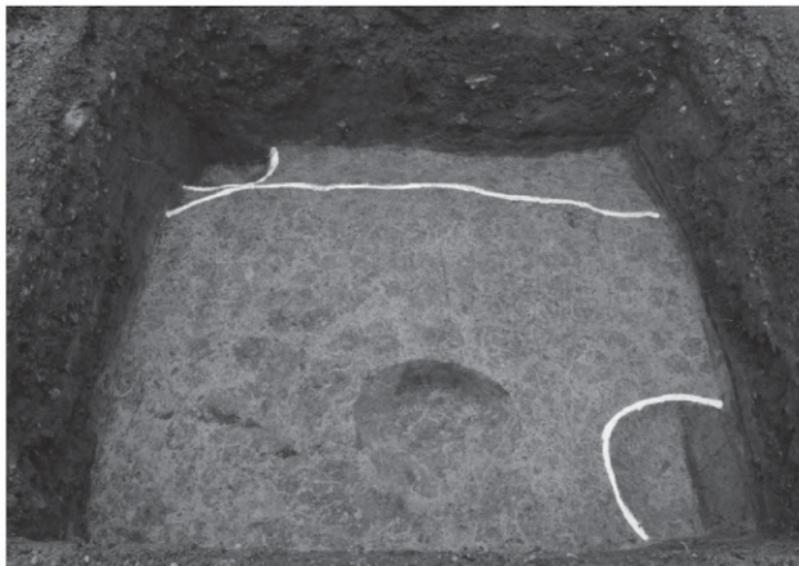
3. 郡遺跡 2016-5 SP1 断面 (南から)



4. 郡遺跡 2016-5 SP2 断面 (南から)



5. 郡遺跡 2016-5 SP3 断面 (南から)



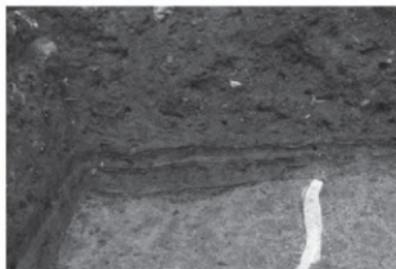
1. 郡遺跡 2017-2 1面全景 (北から)



2. 郡遺跡 2017-2 西壁断面 (東から)



3. 郡遺跡 2017-2 1土坑断面 (東から)



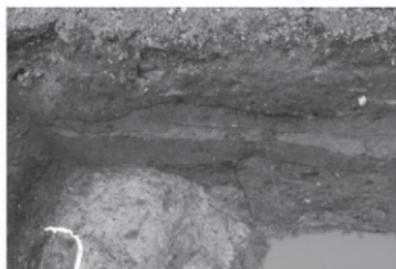
4. 郡遺跡 2017-2 3溝断面 (東から)



5. 郡遺跡 2017-2 2土坑・3溝断面 (西から)



1. 郡遺跡 2016-7 1面全景 (北から)



2. 郡遺跡 2016-7 南壁断面 (北から)



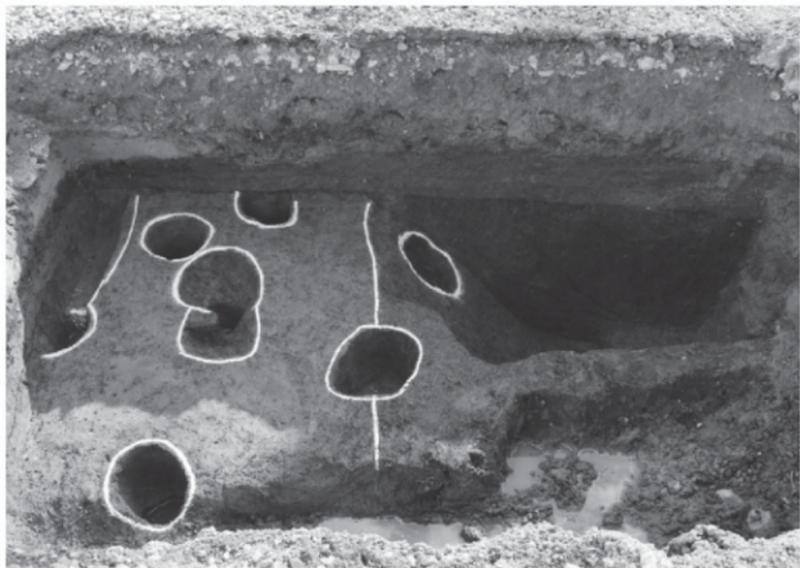
3. 郡遺跡 2016-7 SK1 断面 (西から)



4. 郡遺跡 2016-7 SK2 断面 (南から)



5. 郡遺跡 2016-7 SP1 断面 (北から)



1. 倍賀遺跡 2017-5 1面全景（北から）



2. 倍賀遺跡 2017-5 1 落ち込み断面（北から）



1. 倍賀遺跡 2017-5 2ピット断面 (北から)



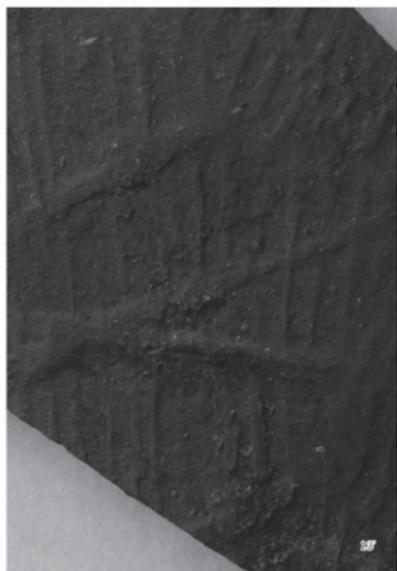
2. 倍賀遺跡 2017-5 3ピット断面 (南から)



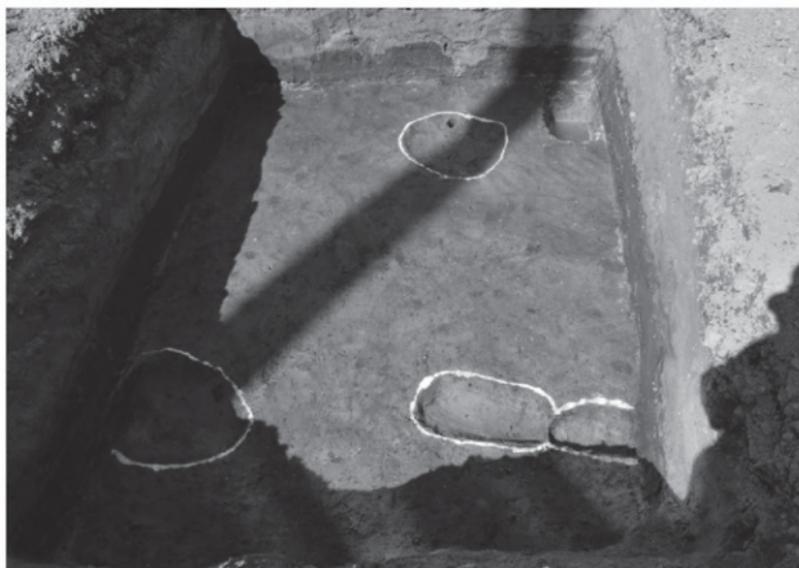
3. 倍賀遺跡 2017-5 7ピット断面 (北から)



4. 倍賀遺跡 2017-5 9ピット断面 (西から)



5. 倍賀遺跡 2017-5 出土遺物



1. 春日遺跡 2016-6 1・2面全景（南東から）



2. 春日遺跡 2016-6 西壁断面（東から）



3. 春日遺跡 2016-6 SP1断面（南から）



4. 春日遺跡 2016-6 SP3断面（西から）



1. 鮎川遺跡 2017-2
1面全景（北から）



2. 鮎川遺跡 2017-2
2面全景（北から）



3. 鮎川遺跡 2017-2
3面全景（北から）



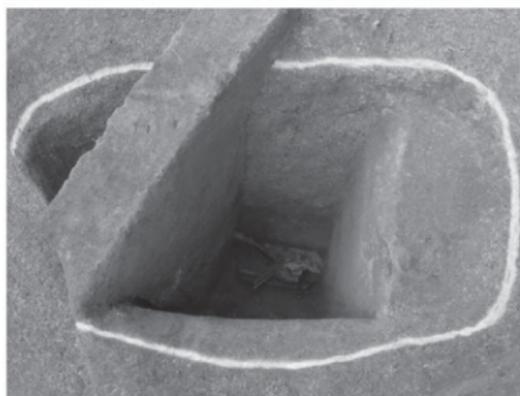
1. 鮎川遺跡 2017-2 北壁断面 (南から)



2. 鮎川遺跡 2017-2 出土遺物



1. 千提寺菱ヶ谷遺跡 2017-1
土坑墓と竜王山（南西から）



2. 千提寺菱ヶ谷遺跡 2017-1
土坑墓部分掘削状況
（南東から）



3. 千提寺菱ヶ谷遺跡 2017-1
人骨出土状況（東から）

報告書抄録

ふりがな	平成29年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—平成29年度国庫補助事業—
書名	平成29年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報—平成29年度国庫補助事業—
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第70集
編著者	木村健明、黒田福嗣、坂田典彦、高村勇士、富田卓見、藤田徹也、正岡大実
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号
発行年月日	平成30年(2018)3月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
茨木遺跡2016-15 [BK16-15]	片柳町	34° 49' 15"	135° 34' 24"	H29.3.7	4㎡	個人住宅 建設工事
茨木遺跡2017-1	上泉町	34° 49' 21"	135° 34' 24"	H29.4.5	6㎡	
茨木遺跡2017-2	元町	34° 49' 06"	135° 34' 19"	H29.4.27	4㎡	
茨木遺跡2017-3	大手町	34° 48' 58"	135° 34' 17"	H29.5.16	4㎡	
茨木遺跡2017-5	宮元町	34° 49' 14"	135° 34' 25"	H29.6.13	4㎡	
茨木遺跡2017-6	片柳町	34° 49' 09"	135° 34' 15"	H29.7.11	6㎡	
上中条遺跡2017-1	上中条二丁目	34° 49' 19"	135° 34' 08"	H29.6.20	6㎡	
郡遺跡2016-5 [KOR16-5]	郡三丁目	34° 49' 53"	135° 33' 21"	H29.1.10	7.5㎡	
郡遺跡2017-2	郡三丁目	34° 49' 53"	135° 33' 21"	H29.5.25	4㎡	
郡遺跡2016-7 [KOR16-7]	上穂積二丁目	34° 49' 27"	135° 33' 35"	H29.2.10	5㎡	
郡遺跡2017-1	五日市緑町	34° 49' 52"	135° 33' 42"	H29.4.19	9㎡	
倍賀遺跡2017-5	春日五丁目	34° 49' 28"	135° 33' 45"	H29.11.15	6㎡	
春日遺跡2016-6 [KSG16-6]	春日二丁目	34° 49' 10"	135° 33' 39"	H29.2.27	7.5㎡	
東奈良遺跡2017-3	沢良宜西 二丁目	34° 47' 52"	135° 33' 54"	H29.5.11	4㎡	
東奈良遺跡2017-6	東奈良一丁目	34° 48' 27"	135° 34' 09"	H29.9.19	6㎡	
東奈良遺跡2017-7	沢良宜西 二丁目	34° 47' 48"	135° 33' 53"	H29.9.22	6㎡	
沢良宜城跡2017-1	美沢町	34° 47' 50"	135° 34' 08"	H29.8.17	6㎡	
牟礼遺跡2016-7 [MUR16-7]	園田町	34° 48' 47"	135° 34' 52"	H29.1.26	6.25㎡	
牟礼遺跡2017-4	園田町	34° 48' 49"	135° 34' 57"	H29.8.18	6㎡	
耳原遺跡2017-2	耳原二丁目	34° 50' 19"	135° 33' 52"	H29.6.23	6㎡	
五日市遺跡2017-1	上野町	34° 50' 14"	135° 33' 39"	H29.8.28	6㎡	
鮎川遺跡2017-2	鮎川二丁目	34° 49' 15"	135° 35' 31"	H29.7.10	4.6㎡	
太田遺跡2017-1	太田二丁目	34° 50' 32"	135° 34' 31"	H29.7.12	6㎡	
西国街道2017-2	豊川四丁目	34° 50' 00"	135° 31' 58"	H29.11.9	6㎡	
千提寺菱ヶ谷遺跡 2016-2(第4次)	大字千提寺	34° 53' 04"	135° 31' 56"	H29.1.23~3.31	236㎡	範囲確認
千提寺菱ヶ谷遺跡 2017-1(第5次)				H29.11.21~ H30.3.31	53㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
茨木遺跡2016-15 [BK16-15]	集落跡	古墳	—	—	
茨木遺跡2017-1	集落跡	古墳	—	—	
茨木遺跡2017-2	集落跡	古墳	土坑、溝	瓦、陶磁器、弥生土器	
茨木遺跡2017-3	集落跡	古墳	—	—	
茨木遺跡2017-5	集落跡	古墳	—	—	
茨木遺跡2017-6	集落跡	古墳	—	—	
上中条遺跡2017-1	集落跡	弥生・古墳	—	弥生土器、土師器、木器	
郡遺跡2016-5 [KOR16-5]	集落跡	弥生・古墳	ビット、溝	土師器	
郡遺跡2017-2	集落跡	弥生・古墳	—	—	
郡遺跡2016-7 [KOR16-7]	集落跡	弥生・古墳	土坑、ビット	—	
郡遺跡2017-1	集落跡	弥生・古墳	—	土師器、須恵器、瓦器	
倍賀遺跡2017-5	社寺跡	古墳	ビット、溝、落ち込み	土師器、須恵器	鳥足文タタキのある 韓式系土器
春日遺跡2016-6 [KSG16-6]	集落跡	古墳	ビット、落ち込み	—	
東奈良遺跡2017-3	集落跡	弥生・古墳	—	—	
東奈良遺跡2017-6	集落跡	弥生・古墳	—	—	
東奈良遺跡2017-7	集落跡	弥生・古墳	—	—	
沢良宜城跡2017-1	城館跡	中世	—	—	
牟礼遺跡2016-7 [MUR16-7]	集落跡	縄文	—	—	
牟礼遺跡2017-4	集落跡	縄文	—	土師器、須恵器	
耳原遺跡2017-2	集落跡	縄文～中世	—	—	
五日市遺跡2017-1	集落跡	—	—	—	
鮎川遺跡2017-2	集落跡	—	—	土師器、須恵器、瓦器、黒色土器	
太田遺跡2017-1	集落跡	弥生～室町	—	—	
西園街道2017-2	街 道	近世	—	—	
千提寺菱ヶ谷遺跡 2016-2	その他の墓	中世・近世	土坑墓・溝・墓	人骨	
千提寺菱ヶ谷遺跡 2017-1					

茨木市文化財資料集 第70集

平成29年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報

—平成29年度国庫補助事業—

発行日 平成30年3月31日

発 行 茨木市教育委員会

印 刷 株式会社トゥユー